

萩原 裕隆定
高橋秀好輯錄

新律附例解補正二

特39

17

倉 函 架 號	大日本教育會館				新 一 一
	五			三	
	六册	三號	二架	三函	

滋賀縣例 存留養親條例中懲役一年以上ニ該ル者云々トアリ律ニハ其死罪ヲ犯シ云々並ニ本刑ヲ加ヘトアリ然レハ終身懲役モ存留養親ヲ聽シ候哉又律ニ再ヒ徒流ヲ犯ス云々御改正ナキヲ以テ考フレハ懲役終身ハ死刑ノ一部ニ準スレハ死罪ト同ク留養ヲ准サス本刑ヲ加ヘ候哉

存留シテ親ヲ養ハシム。其死罪ヲ犯シ。若クハ再ヒ徒流ヲ犯ス者ハ。並ニ本刑ヲ加ヘ。收贖スルコトヲ聽サス。

○附條例

第三十五條 凡犯罪存留養親者徒流並ニ杖一百實決シテ。餘罪ヲ收贖スル律ヲ改メ。懲役一年以

七年一月十五日指令 懲役終身ト雖モ人命放火等ヲ除クノ外改定律例第三十五條ニ照シ留養ヲ準ス法懲役終身收贖金三十五圓ヨリ棒鎖三日原杖一百ヲ金數ニ折シテ扣除シ剩ル金數ヲ收贖ス
同縣例 存留養親條例婦女ノ儀不相見懲役一年以上實斷ノ罪ト雖モ全罪ヲ收贖シ可然乎
七年一月十九日指令 伺之通
同縣例 近江國高島郡今在家村雜業某妻某別紙罪案ノ通ニ付賊盜律竊盜ノ條ニ照シ杖一圓以上懲役六十日ニ處シ可ナラソカ當縣未ク懲役方相設無之候間禁獄ニ換ユルノ所夫年七十以上外ハ侍養ノ子孫ナシ又各居ノ等親ヲ無之然ルニ犯罪存留養親例夫ノ條不相見律ニ正條ナケレハ夫ニ於テ憫然ト雖モ禁獄六十日可申付哉

上ニ該ル者ハ。棒鎖三日ニ科シテ。餘罪ヲ收贖シ。其百日以下ニ該ル者ハ。全罪ヲ收贖スルコトヲ聽ス。

第三十六條 凡懲役一年以上ヲ犯シ。已ニ實斷シテ。役百日ヲ過キ。祖父母。父母。老疾シテ。家ニ侍養

六年八月二十日指令 賊盜律竊盜條
贓一圓以上懲役六十日ニ處ス可キ所
夫七十以上外ニ侍養ノ子孫ナキニ依
リ妻妾ノ夫ニ於ケル猶ホ子ノ父母ニ
於ケルカ如キヲ以テ例ニ據リ全罪ヲ
收贖シテ留養スルヲ聽ル
收贖金十圓五十錢(贓金七圓餘)

金田 政

全縣伺 茲ニ賭博三犯ノ者アリ其冊
年七十以上ニシテ家ニ侍養ノ子孫ナ
シ然レモ同村内ニ弟ノ別籍異居スル
者アリ右ハ侍養ノ子孫アル者ト見做
シ留養ヲ聽サス可然哉 但本文弟己
ニ他家ヲ相續致者ナレハ侍養ノ子孫
ナシトシテ留養ヲ聽シ可然哉
七年三月十五日指令 弟アリト雖モ
別籍異居ニ係ル者ハ侍養子孫ト爲ス
ヘカラス本文ノ如キハ留養ヲ聽ス

ノ子孫ナク。父祖親屬ノ
侍養スルヲ願フヲ切
ナル者ハ。餘罪ヲ。收贖シ
放還スルヲ聽ス。

第三十七條 凡華士族。禁
錮一年以上ヲ犯シ。祖父
母。父母。老疾シテ。家ニ侍
養ノ子孫ナキ者ハ。侍養
スルヲ聽シ。已ムヲ得

關九年四月一日第四十號御布告
改定律例名例律第三拾八條左ノ通改
正候條此旨布告候事

第三拾八條

凡侍養子孫ト稱スルハ年拾六以上ノ
者ヲ謂フ若シ家ニ拾六以上ノ男ナシ
ト雖モ妻若クハ女年拾六以上ノ者
レハ留養スルヲ聽サス
同日第四拾一號御布告
自今滿貳拾年ヲ以テ丁年ト相定メ候
條此旨布告候事

サルノ事故アリト雖モ。
官ニ告ルニ非レハ。外出
スルヲ聽サス。

第三十八條 凡侍養子孫

ト稱スルハ。年十六以上。
成丁ノ者ヲ謂フ。若シ家
ニ丁男ナシト雖モ。妻。若
クハ女。年十六以上ノ者
アレハ。留養スルヲ聽

サス。

婦女犯罪

凡婦女死罪。不孝。姦。盜。人命。放火ノ徒罪以上ヲ犯ス者ハ。各律ニ依テ斷決シ。笞杖ニ該ル者ハ。日數ニ折シ。笞杖一十毎トニ。十日ニ折シテ。禁獄ニ換フ。其餘ノ罪ハ。並ニ法ニ依テ。

收贖スルヲ聽ス。

○附條例

第三十九條 凡婦女不孝。姦。盜。人命。放火ノ徒罪以上ヲ犯ス者ハ。各律ニ依テ斷決シ。笞杖ニ該ル者ハ。日數ニ折シテ。禁獄スル律ヲ改メ。並ニ。懲役ニ服ス。其餘ノ罪。收贖ス可

干葉裁判所伺 是迄婦女準盜論罪ヲ犯セハ實決致來候所今般御頒行相成候改定律例第九十條凡詐欺恐喝取財等盜ニ準スル罪士族ハ破廉耻甚ヲ以テ論ス云々ト之レ有ルヲ以テ權衡ヲ取ルニ婦女ノ準盜罪モ詐欺恐喝取財等ハ實斷シ其棄毀器物等ハ收贖ヲ聽シ可然儀ニ有之候哉

六年 月 日指令 伺之通

滋賀縣伺 婦女犯罪條例第二十九條 不孝姦人命トアリ不孝トハ何々ヲ指候哉 盜トハ何々ヲ指候哉 賊盜律中ニ准盜アリ又戸婚律棄毀器物稼穡盜ノ罪數多有之右ハ如何相心得可

然哉 人命トハ何々ヲ指候哉ト疑テ
生ス謀殺條其罪死ニ至ラサル者及ヒ
闘毆誤殺詐稱殺人私和人命移地界
内死屍將屍圖賴等右ハ如何相心得侯
哉

七年一月十九日指令 第一條 不孝
ノ罪ハ毆罵干名犯義子孫違教等直ニ
祖父母父母ニ對スルノ罪一々枚擧ス
可シス 第二條 賊盜律内ニ在ル者
ハ準盜ト雖モ亦贖ヲ聽サス 第三條
人命ハ凡ソ謀故闘誤殺人ヲ殺死スル
者テ云フ同律内詐稱私和移屍圖賴ノ
類實ヲ用ユト雖モ事情ニ依リ一概ニ
論シ難キ者アリ其情原諒スヘキ者ハ
口供ヲ以テ伺出可シ
滋賀縣婦女犯罪准盜竄收贖處分伺
ノ指令七年二月 賊盜律内ニ非スシ
テ諸律ニ散見スル準盜ノ罪ハ婦女ハ
收贖ヲ聽ス

キ者。無力ニシテ。贖フコ
能ハサル者。懲役百日以
下ハ。折半シ。一年以上ハ。
五等ヲ減シテ。並ニ。懲役
ニ服ス。

第四十條 凡華士族ノ婦
女。不孝。姦。盜。人命。放火ノ
律ヲ犯シ。懲役百日以下
ニ該ル者ハ。日數ニ照シ

テ。鎖錮ニ換ヘ。一年以上
ハ。並ニ。本刑ヲ加フ。

徒流人又犯罪

凡先キニ罪ヲ犯シ。已ニ發
覺シ。尙ホ未タ論決ヲ經ス
シテ。又別罪ヲ犯ス者ハ。先
後二罪ノ重キ者ニ從テ之
ヲ科ス。若シ徒已ニ役シ。流
已ニ配シテ。又別罪ヲ犯ス

者ハ。律ニ依リ。再ヒ後犯ノ
罪ヲ科ス。其重キテ流ヲ犯
ス者ハ。三流。並ニ拘役四年。
若シ徒ヲ犯ス者ハ。後犯ノ
徒限ニ依テ役ヌルモ。亦四
年ニ過ル。トテ得ス。其杖罪
以下ハ。各數ニ依テ之ヲ科
ス。

○懲役人又犯罪條例

原徒流人又犯罪律

第四十一條 凡懲役百日
以下ノ囚。役限内ニ在リ。
又百日以下ノ罪ヲ犯ス
者ハ。前犯ノ日數ニ通算
シテ。之ヲ科ス。若シ後犯
一年以上ニ該ル者ハ。新
ニ後犯ノ罪ヲ全科ス。
第四十二條 凡懲役一年

以上ノ囚。役限内ニ在リ。
 又罪ヲ犯ス者ハ。後犯ノ
 日數ヲ加役スト雖モ。重
 テテ。一年以上ノ罪ヲ犯
 ス者ハ。已ニ役過スル日
 數ヲ通算シテ。前後四年
 ニ過ルヲ得ス。若シ五
 年以上ノ罪ヲ犯ス者ハ。
 已ニ役過スル日數ヲ問

ハス。新ニ。後犯ノ罪ヲ全
 科ス。

第四十三條 凡懲役五年
 以上ノ囚。重テテ五年以
 上ノ罪ヲ犯ス者ハ。並ニ。
 拘役四年ヲ加フ。若シ三
 年以下ノ罪ヲ犯ス者ハ。
 後犯ノ年限ヲ折半シテ。
 加役シ。百日以下ノ罪ヲ

○九年二月廿八日第貳拾貳號御布告
 改定律例中懲役人又犯罪條例懲役人
 逃條例ヲ增補シ第三百二條ヲ刪除候
 條此旨布告候事

懲役人又犯罪條例

凡懲役終身ノ囚人又百日以下ノ罪ヲ
 犯ス者ハ第五條ニ照シテ棒鎖ヲ科シ
 一年以上ノ罪ヲ犯ス者ハ四日以上七
 日以下ノ棒鎖五年以上ノ罪ヲ犯ス者
 ハ八日以上十日以下ノ棒鎖ヲ科ス懲
 役終身ノ罪ヲ犯ス者ハ絞ハ以下第三
 百二條ノ欄外ニ載録ス

補新瀉縣何 懲役十年以下ノ者役限
 内ニ在テ又罪ヲ犯ス者云々ト雖モ懲
 役終身ノ囚人ヘ加役スヘカヲサルヲ
 以テ其百日以下ニ該ル者ハ律例第五
 條原告二十至五十八條鎖一日云々ト
 アルニ依リ棒鎖ニ換ヘ可然哉
 七年十二月八日指令 伺之通

犯ス者モ亦日數ニ照シ
 テ加役ス。
 第四十四條 凡懲役限内
 重子テ罪ヲ犯ス者ハ後
 犯推問曠役ノ日數ヲ以
 テ原役限内ニ算入スル
 ヲ得ス。若シ推問ヲ經
 テ無罪ニ歸スル者ハ仍
 ホ限内ニ算入ス。

此條義重
 敬老慈幼
 矜不成人
 法中之恩
 也註
 癱瘓者或
 折一足或
 折一手指
 折一腰脊
 折一齒及
 侏儒聾啞
 痴呆瘋患
 脚癰之類
 篤疾者或
 瞎兩目或
 折兩肢損
 人兩事如
 瞎一目及
 折一肢及
 類在癱瘓
 之類註

老小癡疾收贖

凡年七十以上十五以下及
 癡疾者死罪ヲ除クノ外
 流罪以下ヲ犯ス者ハ收贖
 ス。
 八十以上十歲以下及口篤
 疾者人ヲ殺シ死罪ニ該ル
 者ハ議擬奏聞シテ上裁ヲ
 請フ。若シ盜罪及口人ヲ傷

上二項不
言教令者
以其猶有
智力非若
九十以上
七歲以下
也亦不言
有仍盡本
犯之條犯
贖免自應
追贖不必
言也註

スル者モ亦收贖スルヲ
準ス其餘ノ罪ハ皆論スル
ト勿レ。
九十以上七歲以下ハ死罪
ヲ犯スト雖モ刑ヲ加ヘス。
若シ教令スル者アレハ其
教令者ヲ罪ニ坐シ贖ノ償
ヲヘキ者アレハ其得ル者
ヲシテ償ハシム。

清乾隆十
年律例
一凡賭一
目之人有
犯軍流徒
杖等罪俱
不得以廢
疾論贖若
毆人瞎一
目者仍照
律科罪

○附條例
第四十五條 凡人ノ一目
ヲ瞎スルハ人ヲ廢疾ニ
致ス律ニ依ルト雖モ一
目ノ人罪ヲ犯セハ廢疾
ヲ以テ收贖スルヲ得
ス人ノ兩目ヲ瞎スルハ
人ヲ篤疾ニ致ス律ニ依
ルト雖モ盲人罪ヲ犯セ

千葉縣同 改定律例第四十七條ニ若
小及ヒ癡疾者官ニ在リ罪ヲ犯スニ公

ハ。懲役ハ。收贖シテ。死罪
ハ。收贖スルコトヲ聽サス
第四十六條 凡盲人及ヒ
癡疾者。姦盜ノ罪ヲ犯ス
者ハ。律例ニ照シテ。收贖
スト雖モ。其強盜強姦ヲ
犯ス者ハ。實斷シテ。收贖
スルコトヲ聽サス。

第四十七條 凡老小及ヒ

罪ハ云々其破廉耻甚ニ係ル者懲役百
日以下ハ除族ニ止メ一年以上云々ト
有之右ハ本貫華士族ニシテ官ニ在
者ヲ指テ云フ事ニ可有之然ルニ第十
五條ニハ華士族罪ヲ犯シ破廉耻甚ニ
係ルト雖モ年七十以上十五以下懲役
十年以下ノ罪ヲ犯ス者ハ並ニ收贖ス
ルコトヲ聽シ除族スルノ限ニ在ラスト
アリ右ハ官ニ在ルト否トノ違ニテ彼
ハ除族シ是レハ收贖ヲ聽シ除族スル
ノ限ニ在ラサル儀可有之然レハ無官
犯罪條ニ無官ノ時罪ヲ犯シ有官ノ後
發覺スル者犯時ノ罪名ニ擬定シ官吏
犯公私非律ニ依リ處斷ス有官ノ時罪
ヲ犯シ免官ノ後事發覺スル者モ亦云
々トアテ依テ無官ノ時罪ヲ犯シ即時
發覺スレハ收贖ヲ聽シ除族ノ限ニ在
ラサル者モ有官ノ後事發覺スレハ除
族ニ處セラレ反テ有官ノ時ノ犯罪ト

癡疾者。官ニ在リ。罪ヲ犯
スニ。公罪ハ。官吏贖罪罰
俸例圖ニ依リ。私罪ハ。官
吏犯私罪律例ニ依ル。其
破廉耻甚ニ係ル者。懲役
百日以下ハ。除族ニ止メ。
一年以上ハ。仍ホ律ニ依
リ。收贖セシム。

第四十八條 凡老小及ヒ

雖モ免官ノ後事發覺スル者ハ其罪ヲ
収贖シ除族スルノ限ニ在ラサル哉
又右第四十七條云々ニ付無官ノ時ノ
犯罪ナレハ有官ノ後事發覺スト雖モ
收贖ヲ聽シ除族スルノ限ニアラサル
哉 同上本籍平民ナレハ如何處斷可
仕哉

七年一月七日指令 第一條 若小及
ヒ廢疾者罪ヲ犯シ有官ノ後事發覺シ
若クハ有官ノ時罪ヲ犯シ無官ノ後事
發覺スルニ其罪破廉耻甚ニ係ルト雖
モ改定律例第十五條ニ依リ並ニ收贖
ヲ聽ス無官犯罪律ヲ以テ論ス可ラス
第二條 本籍平民ニ係ルハ律ニ依
リ收贖セム

○
高知縣伺 島田某儀正歳十六ノ節窃
盜ノ科ニ依リ兩度實決仕令般又々同
斷ノ次第ニ付取調候所安政四年十二

廢疾者。懲役終身以下ヲ
犯ス者。例ニ照シテ。收贖
スルノ後。再ヒ罪ヲ犯ス
者ハ。仍ホ例ニ照シ。收贖
スルヲ聽ス。若シ盜罪。
賭博等。加等ス可キ。再犯
ニ係ル者ハ。但加等ノ罪
ヲ宥メ。本罪ヲ實斷シテ。
再ヒ收贖スルヲ聽サ

月出生ノ者ニ付當三月十五日罪四ノ
年ニ算スル云々ノ御沙汰ニ依レハ昨
年ノ犯罪ハ十四年ト若干月ニ付收贖
ニ相該リ候譯ニ御坐候得共其儘三犯
ト相立懲役十年申付可然哉
六年八月三十一日指令 窃盜三犯五
十圓以下懲役十年ノ所初犯再犯十五
年未滿ナルヲ以テ收贖限内ニ該ルニ
依リ各例律老小廢疾收贖條例若シ盜
罪賭博等加等ス可キ再犯ニ係ル者ハ
但加等ノ罪ヲ宥メ云々三犯以上ハ凡
人再犯以上ノ例ニ照シ加等ストアル
ニ依リ本罪賍金一圓以上懲役六十日
ノ所一等ヲ加ヘ

島田龜太郎
三瀨縣伺ノ指令 六年八月 十五歲以
下ニテ窃盜四犯スル者老小廢疾收贖
條例ニヨリ凡人三犯ノ例ニ照シテ宥

ス。三犯以上ハ凡人再犯
以上ノ例ニ照シテ加等
ス。
犯罪時未老疾
凡罪ヲ犯ス時。未タ老疾ナ
ラスト雖モ。事發スル時。老
疾ナル者ハ。老疾ニ依テ論
ス。
若シ徒ノ年限内ニ在リテ。

斷シ收贖スルヲ聽サス賊盜律傍盜
三犯五十圓以下

懲役十年 中村源吉

種和歌山縣例 律例第四十八條云ニ

婦女ノ賭博再犯ニ係レハ老小癡疾者

ノ權衡ヲ量リ加等ノ罪ヲ宥メ本罪ヲ

實斷シ可然哉

○ 八年一月十七日指令 伺之通

七年三月十三日山口縣へ達書別紙

凡懲役終身ニ發遣シ老疾スル者人命

放火等ヲ除ク外其羸弊シテ役ニ堪ヘ

サルノ証確實ナルヲ待テ收贖放免ヲ

聽ス法懲役終身收贖金三十五圓ヨリ

已ニ役スル日數年數ヲ金數ニ折シ扣

除シ剩ル金數ヲ收贖セシム存留養親

者ハ第三十五條ニ照シ格領ニ科シ餘

罪收贖亦此法ニ依ル

東京裁判所伺 懲役限内者疾ニ至ル

犯罪在幼
小之時事
發于長大
之後似可
受刑而仍
照幼小科
斷蓋老疾
則憫其現
在幼小則
矜其已往
仁之至也
増註

老疾スル者モ亦上條ノ如

ク收贖スルヲ聽ス。

其罪ヲ犯ス時幼小ニシテ

事發スル時長大ナル者ハ

幼小ニ依テ論ス。

○ 附條例

第四十九條 凡懲役限内

老疾收贖者孤獨貧困ニ

シテ即時贖フ能ハサ

者ハ律例ニ照依夫々處置致シ候得共

此程相伺置候云々某ノ如キ癡疾ニ

至ルニ無之外疾病ニテ役限内不治ノ

症ニ至ル趣懲役場ヨリ申越ス者住々

有之右ハ醫案確實ナレハ罪犯百日以

上以下ヲ不論總テ收贖ヲ聽シ無力ニ

シテ贖フ能ハリル者ハ直チニ放免

シ可然哉

六年八月廿九日指令 百日以下ハ伺

之通其以上ハ一概ニ放免ヲ聽サス但

人命ニ關スル犯罪ヲ除ク外本罪懲

役三年以下ノ者ニ於テハ又伺ノ通

若松縣伺 懲役十年ノ者癡疾ニ係リ

收贖ハ可キニ親族微力ニシテ贖フ能

ハス依テ原料五等ヲ減シ懲役二年申

付ルニ既ニ役過スル日數二年以上ナ

ルトキハ放免シ可然哉

七年一月十九日指令 懲役十年ノ囚

二年ヲ役過スルモ未タ三年ヲ過サレ

ル者ハ贖金延期限内輕
役ニ拘服ス。

第五十條 凡懲役一年以

上ノ罪犯病ニ罹リ休役

スル者一年毎ニ日數五

十日以内ハ限内ニ算入

シ五十日以外ハ病愈ル

ヲ待チ仍ホ役ヲ償ハシ

ム百日以下ノ罪犯日數

ハ七年ノ限ニ入ラス猶十年ノ限内ニ有ニ依リ矢張十年ヨリ五等ヲ減シ懲役二年ニ科ス強壯ノ時日ニ役過スル二年ヲ老疾後ニ計算スルヲ用ヒス同縣伺 懲役百日以下ノ者病ニ係リ役場ヲ出シテ責付シ全快ヲ待テ役ニ服スト雖モ或ハ癡疾ニアラス一時不治ノ病ニテ一年若クハ二年ヲ過ルトモ平愈ノ後ハ仍ホ役ニ服シ可然哉右等ノ者ハ既ニ役スル日數ヲ除キ杖贖シ可然哉若シ贖ヲ能ハサレハ折半シテ役ニ服シ既ニ役スル日數折半以上ナルキハ放免可然哉

十分ノ二ハ算入シ十分ノ二ニ過ル者ハ亦償ハシム。若シ數次ニ及フ者ハ通計合算シテ乗除ス。其役場ヲ出シテ責付スル日數ハ一體ニ限内ニ算入セス。
給沒贓物
凡取與俱ニ罪アル。受財枉

關及者事 限内ニ算入スルニ付假令五十日以外ト雖モ五十日ハ限内ニ入レ殘リ日數及之者推テ償ハシメ候哉
凡係人與 而及之也
事各有不 同而罪無
分別者則 以及字聯
屬之入釋 字釋

關及者事 限内ニ算入スルニ付假令五十日以外ト雖モ五十日ハ限内ニ入レ殘リ日數及之者推テ償ハシメ候哉
凡係人與 而及之也
事各有不 同而罪無
分別者則 以及字聯
屬之入釋 字釋

稱司法省七年第二十八號布達強竊盜枉法不枉法坐職ノ追徵法七贓例圖ノ欄外ニ載ス

七年四月八日第四十二號御布告 府縣並各裁判所贖金類納方ノ儀六年

進累者也

法不枉法ノ贓及ヒ犯禁ノ物ハ並ニ官ニ沒入ス。若シ取與俱ニ和セス。恐喝詐欺強買賣科斂求索等ノ贓ハ。並ニ本主ニ追還ス。若シ強竊盜枉法不枉法坐職等ノ贓ヲ以テ罪ニ入ルニ正贓現在スル者ハ。官物ハ。官ニ還シ。私物ハ。主ニ還

一月第十九號ヲ以相違置候所自今官
ニ遷スヘキ駐金ハ司法省ヘ納ルニ不
及直ニ其主贖ノ官廳ヘ還附可致候事
但官沒ノ分ハ從前ノ通可取計事
壬申十月 日司法省布達 新律中
贓物ノ價錢ヲ估計スルハ云々罪名ヲ
定ムト有之候處右ハ商賈ヲ召シテ估
計セシム之ヲ評價人ト稱ス依テ右評
價ノモテ以テ商賈ヲ役使スル者ハ一
日五十錢半日廿五錢ト定メ雇錢相渡
可申事 但入札法ヲ以テ商賈ヲ召シ
估却スルハ此限ニ在ラス
壬申八月四日司法省決議 省中贓物
類入札拂下ノ節官員之向ヨリ右入札
落札ニ付登割ノ利息ヲ加ヘ商人相對
ニテ引取候風習モ有之候處不都合ノ
譯ニ付自今屹度差止候事

ス。若シ正賊已ニ費用スル
者ハ。追徴スル。勿レ。埋葬
金兩。雇工賃錢モ。本犯身死
スレハ。亦追徴スル。勿レ。
其贓物ノ價錢ヲ估計スル
ハ。皆犯處當時中等ノ物價
ニ據テ。罪名ヲ定ム。夫匠等
ノ工錢ハ。一人一日ニ若干
錢ヲ以テ定數ト爲シ。牛馬

本價爲準
不得多追
子不可多
于母也

京都裁判所伺 農夫ニシテ穀物ヲ市
ニ鬻ク者アリ然ルニ其所鬻ノ穀物盜
賊ニ係ルニ依リ之ヲ追徴スルニ其買
得者ハ農夫ヨリ買取スルヲ以テ農夫
公商ト見做シ改定律例第五十一條ニ
照シ致處斷可然哉
七年三月十三日指令 伺之通

車船等ハ。時ノ雇工賃値ニ
照シテ。日數ヲ算シ。賃錢多
シト雖モ。其本物ノ價ニ過
ル。ト得ス。

○附條例

第五十一條 凡正賊現在
ト稱スルハ。贓賊ノ手ニ
存在シ。及ヒ輾轉シテ。他
人ノ手ニ在ル者ヲ謂フ。

若シ買取シテ。公商公買ニ由ル者ハ。正贓現在スト雖モ。商買其價ヲ償ハサレハ。直ニ追徴スルヲ得ス。

第五十二條 凡贓物現在シ。及ヒ現在セスト雖モ。事主本犯ノ口供ヲ審明シ。評價人ニ估計セシム。

六年七月二十四日第二百七十三條布告制定條例

給没贓物條例
凡正贓轉帳シテ遠地ニ有ル者其郵便費用ハ本犯ニ償ハシムト雖モ本犯資力ナケレハ本主ニ償ハシム若シ本主郵遞ノ經費ヲ厭フ者ハ正贓所在ノ地ニ於テ其物品ヲ販賣シ金圓ヲ本主ニ還給ス

竊小盜條例 盜賊タルヲ知ラス買

若シ犯所遠隔ニシテ。事主ノ口供ヲ審スルニ便ナラサル者ハ。本犯ノ口供ニ依リ。罪ヲ定ム。

第五十三條 凡盜賊タルヲ知ラスト雖モ。買取シテ。公商公買ニ由ラサル者ハ。直ニ追徴スルヲ得。其轉賣スル者ハ。仍

新訂刑罰令

取シテ公商公買ニ由ラス盜犯資力ナキ時申初買者ニシテ乙乙ヨリ丙ヘ代價存在スルニ付追徴シ乙乙同斷ニ付丙ヘ償甲ハ費スルト雖モ賊ヨリ買取スルホ念テ資力限リ償ハシメ可然哉 同斷代價丙ヨリ追徴候上ハ乙甲ハ費用スルモ順次ニ追徴セシムヘハ哉 該犯所有物ノ内負債ノ書入ニ致シ居候ハ除テ追徴ニ不及候哉 同斷米金貸附期限中ノ證券等ハ入札拂ニ及ヒ代價追徴可然哉
七年十月十九日指令 第二二條盜犯資力ナクシテハ初買者ヨリ賣德テ資力限リ追徴シテ事主ニ給ス 第三條 伺之通 第四條 事主ニ給ス可シ

ホ轉償セシム。
第五十四條 凡轉賣スル賊物ハ轉償セシムト雖モ。若シ轉償者死亡破産等追徴スルコト能ハサレハ。賊物現在ノ所ヨリ直ニ追徴スルコトヲ得。其公商公買ニ由ル者ハ。此例ヲ用ロス。

新瀛縣伺 改定律五十五條ニ盜犯正贓已ニ費用シ云々必ス追徴シテ本主ニ給スト有之右追徴ノ心得左之通ニテ可然哉 假令ハ盜犯資産金百圓アリ他ノ負債百圓アリ賠償スヘキ金モ又百圓ナル時ハ賠償スヘキ資力ナキ者トシ追徴スルニ及ハサルヤ盜犯資産百五十圓アリ他ノ負債百圓アリテ賠償スヘキ金五十圓ナル時ハ資力アル者トシ五十圓追徴シテ本主ニ給スヘキ哉盜犯資産二百圓アリ他ノ負債百圓アリテ賠償スヘキ金百五十圓ナル時ハ資力アル時ハ百圓ヲ追徴シテ本主ニ給シ不足ノ五十圓ハ本主ノ損失トスヘキ哉盜犯處刑ノ日賠償スヘキ資力ナク及ヒ賠償シテ全カラサル者他日賠償スヘキ資産ヲ立ルニ至リ本主ヨリ賠償ヲ求ムルト雖モ再ヒ賠償セシムルニ及ハサル哉 盜犯資力ノ有無他ノ負

第五十五條 凡盜犯正贓已ニ費用シテ。現在セスト雖モ。賠償ス可キ。資力アル者ハ。必ス追徴シテ。本主ニ給ス。

第五十六條 凡盜賊メルトヲ知ラスト雖モ。其餽送纏頭ニ係ル者ハ。必ス追徴シテ。本主ニ給ス。若

債ノ有無等ヲ檢定スルハ身代限處分ノ方法ニ依ルヘキ哉

七年一月七日指令 第一條 事主ヘ全ク賠償セシムヘシ 第二條 伺之通 第三條 盜賊賠償ト負債償却ト併セ論ス可ラス 盜賊身代限ノ限ニアラズ

山梨裁判所伺 改定律例第五十五條 凡盜犯云々然ニ首從アリテ竊盜又ハ詐欺等ノ罪ヲ犯シ假令ハ贓金百圓ヲ盜取從ハ逃走シ首一人捕縛相成糾問及フ所右百圓ノ内七十圓ハ從持去リ三十圓首配分受ケ費用スト申立ル時ハ賠償ノ儀首一人ニ全贓百圓ヲ償ハシムヘキ哉又ハ配分ノ三十圓ヲ賠償可爲致哉賠償スヘキ資力アル者トハ犯人家長ナレハ一家ノ財産卑幼ナレハ其身所持品ノ内身代限法方ニ習ヒ必用ノ品ヲ除キ候外金錢財産ノ貯ヘ

シ己ニ費用スル者ハ追徵スルコト勿レ。

第五十七條 凡盜賊ヲ以テ物品ヲ買取シ人ニ餽送スルニ物品現在スル者ハ追徵シテ本主ニ給ス。若シ己ニ費用スル者ハ追徵スルコト勿レ。

第五十八條 凡盜賊ヲ以

アル者ヲ可申哉

七年二月五日指令 第一條 首從共ニ捕ニ就ク時ハ共ニ賠償セシム可シト雖モ首犯捕ニ就キ從ハ脱逃ス捕獲ノ日ヲ期シ難シ又事主ヲシテ損失ヲ蒙ラシム可ラス首犯一人ヲシテ全贓ヲ賠償セシム可シ 第二條 有力無力ナカテ分別シ本犯一人ノ資力アル限追徵シ仍ホ金數不足スルキハ事主ノ損失トス負債身代限ノ法ヲ用ヒス 京都裁判所伺 諸贓追徵ノ儀ニ付先般相伺候處凡正贓費用シテ賠償スヘキ資力ナキ者ハ追徵スルコト勿レ身代限ノ限ニアラスト御指令之アリ右ハ假令十圓ノ正贓費用シテ其半五圓賠償ス可キ資力アラハ其五圓ヲ追徵スル等ノ處置致シ可然哉 七年一月三十一日指令 資力限り追徵ス可ヲ 但身代限ノ法ト異ナリ

テ舊債ニ抵償スル者ハ債主情ヲ知ラスト雖モ仍ホ追徵シテ本主ニ給ス。若シ己ニ費用スル者ハ追徵スルコト勿レ。

犯罪自首

凡罪ヲ犯シ事未タ發覺セシテ自ラ自首スル者ハ其罪ヲ免ス。贓アル者ハ仍

親屬爲首
猶出于親
愛之意相
告言則恐
恨而許發
矣告言之
本念雖與
爲首不同
而但論其
得相容之
眞即得免
罪若卑幼
于尊長則
告言者仍
照干名犯
義之律問
罪蓋名義
所關反惡

同所伺 凡盜犯正贓已ニ費用シテ現
在セスト雖モ賠償ス可キ資力アル者
トハ獨盜犯ノミナラス公商買ニ由ラ
スシテ買取スル者モ正贓費用スルニ
係ラハ仍ホ追償スヘキ哉
七年一月三十一日指令 資力アリト
雖モ己ニ費用スル者ハ追徴セズ
石川縣伺 盜贓タルヲ知テ貫ヒ受ル
科ニ依リ刑ニ處セラレ後再ヒ盜贓ト
知テ受テ復刑ニ處セラレ然ルヲ尙亦
盜贓ト知テ受テ罪跡同一ニシテ既ニ
三犯タリ律ニ云盜ニ準シテ論スル罪
ハ犯數ニ計ヘスト又云盜贓タルヲ知
テ故買シ及ヒ牙保スル者等再犯以上
一等ヲ累加ス云々アリ該犯ノ如キ情
狀實ニ悔悟ノ念ナク其犯跡可惡ノ甚
シキ者彼ノ盜贓ヲ知テ牙保スル等ノ
者ニ比スレハ權衡如何
七年二月十二日指令 強盜盜ノ贓タ

ホ追徴シテ。官物ハ。官ニ入
レ。私物ハ。主ニ給ス。
其本犯人ヲ遣シテ代首セ
シメ。若クハ相容隱スルコ
ヲ得ル者。爲ニ代首シ。及ヒ
告言スルハ。各罪人自首法
ノ如ク。罪ヲ免ス。若シ自首
シテ。不實不盡ナル者ハ。不
實不盡ノ罪ヲ以テ。之ヲ罪

其倒行逆
施不相容
隱也轉註

ルコヲ知テ受ル者ハ再犯以上ハ一等
ヲ加ヘ罪懲役七年ニ止ル

福岡縣伺 犯罪自首云々凡罪ヲ犯シ
首タル者自首スレハ其從及ヒ連累人
ハ自首ノ情ヲ知ルト知ラサルトテ問
ハス全其罪ヲ免ス可キカ又其從及ヒ
連累人首告スト雖モ原犯人ノ罪免ス
可ラサルカ人ノ官ニ陳告セシコトヲ知
テ自首スル者本犯人減等スレハ其從
及ヒ連累人モ亦減等スヘキカ又其從
及ヒ連累人ヨリ自首スト雖モ原犯人
ハ減等ノ限ニ非ス候哉
六年八月二十五日指令 連累人ハ自
首ノ情ヲ知ルト否トテ問ハス正犯減
等免罪ニ從ヒ減免スト雖モ連累人自
首スルトモ正犯ハ減免ノ限リニアラ
ス首從正犯連累ト異ナリ各自犯ス者
ニ因リ首ノ自首スルモ從ハ免罪ノ限

ス。假令ハ。本犯強盜ヲ窃盜
ト首スレハ。其不實ナルヲ
以テ。強盜ノ罪ニ坐ス。若シ
竊盜賊一百兩ヲ。六十兩ト
首スレハ。其不盡ナルヲ以
テ。仍ホ四十兩ノ罪ニ坐ス
若シ首スルトコロ。不實ノ
罪重ク。不盡ノ賊多クシテ。
各罪死ニ至ル者ハ。一等ヲ

ニ在ラス

減スルコトヲ聽ス。若シ人ノ官ニ陳告セント欲スルコトヲ知テ。自首スル者ハ。本罪ニ一等ヲ減ス。其人ヲ損傷シ。及ヒ賠償ス可ラサルノ物ヲ毀棄シ。若クハ姦スル者ハ。並ニ自首ノ律ニ在ラス。若シ強竊盜。及ヒ詐偽シテ。

財物ヲ取リ。事主ノ處ニ於テ自首シ。或ハ枉法。不枉法ノ贓ヲ受ク。過テ悔ロテ。本主ニ還付スル者ハ。官司ニ自首スルト同ク。皆其罪ヲ免ス。若シ人ノ告ント欲スルヲ知テ。財主ノ所ニ於テ自首スル者ハ。一等ヲ減ス。若シ自首シテ。贓徵ス可ラ

名東懸伺 凡罪囚ヲ捕獲スルヤ其始
メ姦盗人命等所犯ノ踪跡ヲ認テ得其
目ヲ付シ該伺ニ送リ經承官吏モ亦其
目ニ就テ鞠獄案ヲ成スト雖モ復審問
ニ臨ミ其他ノ犯情モ悉ク承招スヘシ
ト詰問スルヨリ恐喝取財ノ凶強盜ヲ
承招シ竊盜ノ犯人賭博ヲ供狀スル如
キ官ノ威嚴ト鞠吏ノ詰詞ニ依リ吐露
スル者ニテ敢テ改過自責シ悔悟ノ念
有ルニ非レハ二罪共發一ノ重ヲ取リ
結案スル辨ヲ待ス然ニ御省目録後第
二十八號度會懸伺姦盜ヲ鞠問訊杖モ
不加シテ強盜賭博ヲ承招スルハ強盜
賭博ハ自首ト見做ス可シト御指合有

ナルハ。二等ヲ減ス。

○附條例

第五十九條 凡罪ヲ犯シ
人ノ官ニ陳告セント欲
スルコトヲ知テ自首スル
者ハ。本罪ニ。一等ヲ減ス
ル律ヲ改メ。減二等ニ從
ヒ。官ノ捕獲セント欲ス
ルコトヲ聞テ。自首スル者

之犯罪自首條例官ノ捕獲セント欲ス
ルヲ聞テ自首スル者ト雖モ一等減
在死ヤ鞠訊ニ係ル者ナ裁最モ鞠問上
ト雖モ事故ニ依リ悔悟ノ念厚ク人ヲ
感動スルニ足ル者ハ特別ノ稟議ヲ經
ル者勿論ナレトモ概シテ自首ト見做シ
難キ哉

七年一月三十一日指令 罪囚ヲ鞠訊
スルニ官吏ノ意外ニ別罪ヲ供狀スル
ハ其別罪ハ自首ニ依テ論ス蓋シ官ノ
捕獲セントスルヲ知テ自首スル者ハ
其官ノ指ス罪ヲ自首スルヲ謂フ故ニ
一等ヲ減シ若シ官指ス所ノ罪ニ非サ
ル餘罪ヲ自首スル者ハ亦自首ト同ク
論ス因テ減等全免ノ趣ハアルト心
得可シ

ハ。本罪ニ。一等ヲ減ス。
第六十條 凡罪ヲ犯シ。事
已ニ告發ヲ經ルト雖モ。
本犯。未タ知ラス。及ヒ官
罪犯ノ名ヲ知ラスシテ。
自首スル者ハ。仍ホ未發
自首ト同ク。並ニ。罪ヲ免
ス。

申旆裁判所例 其姦盜ノ罪ヲ犯シ後
テ人ヨリ質問テ受テ依テ首服スル者

第六十一條 凡越獄逃走

ニ候ハ其未ク事發覺セサル内事主ノ所ニ首服スルヲ以テ官司ニ首服スルト同ク其罪ヲ免シ可申哉又ハ右質問ヲ受テ依テ首服シ眞ニ罪ヲ悔ル心薄キ者ニ付知人欲告而首ト云フヲ以テ論ス可キ哉 但窃盜事主ノ質問ヲ受テ即時悔悟セム一旦ハ彼是ト言紛ハスレトモ竟ニ押隠シ難ク依テ有体首服シ其事主ニ於テハ全盜犯トハ知ラズ以推量ヲ以テ質問ニ及フ所果シテ如斯首服スルニ依リ盜罪賠償ヲ受ケ内濟ス斯ノ如キ者ト雖モ本文ノ如ク全ク事發覺セサル内首服スル者ニ候ヘハ其罪ヲ免サレ可ク候哉
六年八月二十日指令 村民二十餘名各盜犯ヲ入札シテ同一該犯ヲ暗射スト雖モ確乎其名ヲ的知スルニ至ラズシテ首服スルヲ以テ犯罪自首條例事已ニ告發ヲ經ルト雖モ官罪犯ノ名ヲ知

シテ自首スル者ハ止タ加等ス可キ罪ヲ減シテ本罪ハ減スルトテ聽サス。
第六十二條 凡賊罪ヲ犯シ人ノ告ント欲スルトテ知テ自首シ賊徵ス可ヲサル者モ例ニ照シテ本罪ニ二等ヲ減ス。

ヲシテ自首スル者ハ仍ホ未發自首ト同ク罪ヲ免スト云フヲ以テ論シ免罪 池田 幸藏
人ノ勸誘ニ隨ヒ罪ヲ謝スルニ酒食ヲ以テス別ニ罪ノ責ムヘキナシ

○ 圖京都裁判所伺 犯罪自首條自首シテ罪徵ス可カラサルニ依リ二等ヲ減シ人ノ告ント欲スルヲ知テ自首スル者モ同減二等ノ條例アリ然ルニ其盜犯ニ於ル多ハ是貧困ノ者無智ノ所爲ニ出テ而シテ偶良心ヲ生シ過テ悔ヒ投首ニ及フ者罪徵スル能ハサルトテ其罪減ニ二等ヲ減シ人ノ告ント欲スルヲ知リ首出致シ眞ニ罪ヲ悔ルノ心ナキ者同二等ヲ減スルハ其情狀ノ輕重於テ斟酌ノ權衡如何可有之哉
七年十月十二日指令 悔悟ノ情ハ原ス可シト雖モ事主ノ損失ヲ贖フト能

第六十三條 凡首免ヲ與フルノ事ニ因リ首免ヲ與ヘサル罪ヲ犯シ自首スル者ハ因ル所ノ原罪ヲ免シ止タ首免ヲ與ヘサルノ本罪ヲ科ス假令ハ強竊盜ヲ犯シ因テ人ヲ殺傷スル者ハ其強竊盜ハ首免ヲ與フト雖モ

ハス故ニ本罪ニ二等ヲ減ス人ノ告ン
ト欲スルヲ知テ自首スル者ハ賊徵ス
可キモ二等ヲ減ス權衡不委ニ非ス律
例ノ通心得可シ

豐岡縣伺 首從金圓ヲ竊盜シ後ヲ過
テ悔ヒ首從俱ニ自首シテ首ハ假令ハ
贓金五百圓ノ内三百圓ヲ徵スルヲ以
テ剩贓二百圓本罪懲役十年ニ二等ヲ
減シ懲役五年從ハ五十圓ノ分配ヲ請
ケ自首シテ其贓不可徵トキハ五十圓
ノ本罪懲役一年ニ二等ヲ減シ懲役九
十日ニ處シ可然哉
七年一月二十八日指令 贓金五百圓
ヲ共ニ盜メハ自首スルト雖モ内二百
圓徵ス可ラサルニ付二百圓ノ本罪ヨ
リ二等ヲ減シ懲役五年從ハ又一等ヲ
減テ懲役三年

殺傷ハ。謀故闕過失ノ各
法ヲ盡スノ類。

第六十四條 凡罪ヲ犯シ。
自首スル者。假令ハ竊盜
贓百圓。五十圓ハ。仍ホ現
在シ。五十圓ハ。己ニ費用
シテ。追徵スルヲ能ハサ
レハ。五十圓ノ贓ニ。二等
ヲ減シテ。罪ヲ科ス。其餘

ノ贓罪モ。亦之ニ準ス。

第六十五條 凡人ヲ罪ニ
誣告シテ。自首スル者ハ。
己斷。未斷ヲ分テ。未タ受
斷ヲ經サルハ。仍ホ首免
ヲ聽シ。己ニ受斷ヲ經ル
ハ。告誣ノ本罪ヲ科ス。
第六十六條 凡罪ヲ首シ。
減免ヲ經ルノ後。再ヒ同

關水澤縣伺 竊盜ヲ首シ減免ヲ經ル
ノ後強盜ヲ首シ及ヒ強竊盜ヲ首シテ
減免スル後監守常人盜ヲ首シ若クハ

準盜ヲ首ニテ減免スル者再ヒ監守常
人強竊盜ヲ首スルノ類前後罪名異ア
リト雖モ其盜罪タル一ナレハ並ニ同
罪ヲ首スル者ト同ク減免ヲ聽サス可
然哉
八年三月三十一日指令 伺之通 但
棄毀器物等ノ准盜ハ此限ニ在ラス

罪ヲ犯ス者ハ。減免スル
コヲ聽サス。若シ前後犯
罪。各別ナル者ハ。此限ニ
在ラス。

第六十七條 凡華士族罪
ヲ犯シ。自首スル者。破廉
耻甚ニ係ルト雖モ。本條
自首ヲ聽ス可キ者ハ。一
體ニ罪ヲ免シ。除族スル

ノ限ニ在ラス。

第六十八條 凡華士族罪
ヲ犯シ。人ノ告ント欲ス
ルコヲ知テ。自首スル者。
本條自首ヲ聽ス可キ者
ハ。罪減等セスシテ。闕刑
ニ處シ。破廉耻甚ヲ以テ
論セス。

第六十九條 凡知人欲告

而首ト稱スルハ。名ヲ指
 テ官ニ告ケ。事已ニ發セ
 ント欲スルヲ知テ。自
 首スル者ナ謂フ。真ニ罪
 ナ悔ル心ナク。事發シ。罪
 ナ長ク。ニ因リ首出ス。
 故ニ本罪ニ。二等ヲ減ス。
 聞捕而首ト稱スルハ。官
 司。人ヲ差シ。已ニ捕獲セ

ント欲スルヲ知テ。事
 テ。自首スル者ヲ謂フ。事
 機緊急。已ムヲ得サル
 ニ出テ。悔懼ノ心。尤モ薄
 シ。故ニ本罪ニ。一等ヲ減
 ス。越獄而首ト稱スルハ
 已ニ囚禁セラレテ。越獄
 逃走シ。自首スル者ヲ謂
 フ。止タ越獄ノ加等ス可

京都裁判所伺 常吉儀竊盜三犯ノ廉ハ五十兩以下滿流ニ該ルト雖モ其初犯ノ節所際ノ竊盜從徒七十二兩餘徒一年半ノ内管五十ヲ決了スルニ付剩杖一百三十即徒一年零一十日ニ折シ三犯滿流ノ上ニ加役スヘキ所仍ホ所隱持兇器強盜ノ頂人ヲ傷シ財ヲ得サ
ルノ從ニ付本犯一等ヲ減テ准流十年已ニ決了スル管五十ヲ除キ九年三百十五日ニ該ルニ付右一罪ノ重ヲ以テ三犯滿流ノ上更ニ九年三百十五日加役可申付哉 但前犯強後犯竊及ヒ後

キ罪ヲ免シテ本罪ハ減スルヲ聽サス
二罪俱發以重論
凡二罪以上俱ニ發覺スレハ一ノ重キ者ヲ以テ論シ各等キハ一ニ從テ科ス若シ一罪先キニ發シ已ニ論決ヲ經テ餘罪後ニ發シ輕ク若クハ等キハ論スル

犯強前犯竊盜等ノ如キ強竊相交ル三犯者ハ並ニ絞ニ處スル例ニ有之候所常吉ニ於テハ初犯ノ強ハ未タ處決ヲ經サル者ニ付犯數ニハ計ヘ難ク可有之哉
六年九月三日指令 賊盜律竊盜條竊盜三犯五十圓以下 常吉
懲役十年
但初犯供認不盡ノ贓及持兇器強盜外ニ在テ瞭望スルハ二罪俱發ヲ以テ論シ三犯ノ上ニ加等セス
印旛裁判所伺ノ指令 六年 月 日 賊盜律條例強盜未タ室ニ入り財ヲ搜セス外ニ在テ瞭望シ云々本犯ニ一等ヲ減スト云ニ擬シ犯罪改定律前ニ在ルヲ以テ斷罪依新領律條例ニ依リ旧律ノ減法ニ從ヒ懲役十年ノ所先キニ強盜ノ贓タルヲ知テ受ルト偽リ已ニ徒二
年半ノ處斷ヲ受ケ役ニ在ル一年半百

勿レ重キハ更ニ論シ前罪ニ通計シ後數ニ充ツ其賊罪ニ係ル者ハ重賊ヲ以テ輕賊ニ併セ重キニ從テ科ス若シ併セテ仍ホ輕ク若クハ等キハ一ノ重ニ從テ科ス輕賊ヲ以テ重賊ニ併スルヲ得ス假令ハ枉法贓百兩ヲ犯シ又竊盜二百

日ニシテ罪ノ不實ナルヲ發露ス名例
律餘罪後ニ發シ云々重キハ更ニ論シ
前罪ニ通計シテ後數ニ充ツトアルニ
依リ已ニ役スル日數ヲ扣除シ剩ル日
數ヲ科ス

懲役八年ト七十五日 川村常吉
初メノ處斷改曆以前ニ在ルヲ以テ仍
ホ一年三百六十日ノ數ニ依テ科斷ス
奈良縣伺 爰ニ犯罪アリ一ハ常律ヲ
犯シ一ハ諸稅罰則ヲ犯ス者常律贖金
ト諸罰金ト比較シ二罪俱發ト見做シ
金數ノ多ニ依リ一ニ從テ科シ候テ可
然哉常律ト諸稅則トハ二罪俱發ノ限
ニアラサル哉
六年八月廿五日指令 二罪俱發律ヲ
以テ論セス各自ニ罪ヲ科ス可シ
筑摩縣伺 蠶種規則違犯ノ者處分ノ
儀營ヘハ甲不正ノ原紙百枚ヲ乙ニ賣
リ乙其紙へ濫製種ヲ仕付又甲へ賣ル

兩ヲ犯セハ枉法贓ヲ以テ
竊盜ニ併セ三百兩綫ニ處
ス 監守盜七十兩ヲ犯シ又
不枉法一十兩ヲ犯セハ罪
仍ホ輕シ一ノ監守盜七十
兩ヲ以テ科ス 常人盜八十
兩ヲ犯シ又竊盜一十兩ヲ
犯セハ罪等シ一ノ常人盜
八十兩ニ從テ科スルノ類

甲ハ其品ヲ丙へ賣リ後發覺スル時甲ハ不正ノ原紙ヲ賣ルノ科ニ濫製種買取ノ科ニ罪俱
ニ發スルヲ以テ一ノ科料多キ方ニ依リ處分致シ可然哉又ハ規則廉限リ各別ニ處分可致
候哉
六年八月十九日指令 蠶種規則違犯ノ者ハ二罪俱發ノ例ヲ以テ論セス犯則ノ廉々各別
ニ處分可致事
三瀨縣伺 御省日誌陸軍裁判所問合御回答違式誣違等ノ罪ト別罪俱發ノ犯罪ハ二罪俱
發以重論ノ例ニ無之各別ニ處分致ス事ト相見候然ニ假令ハ他村又它人持場ノ株ヲ斷
リナク新採ル處斷ヲ受ルヨリ殺傷ニ至ル類モ則違式ト闘毆各別ニ處分シ可然哉
七年一月八日指令 違式誣違等ノ罪ト別罪俱ニ發スルハ陸軍裁判所問合ノ通各別ニ
處分スヘシハノ持場ノ株ヲ斷リナク新採ルヨリ遂ニ毆傷ニ至ル者ハ闘毆律ニ依テ處斷
ス

福岡縣伺 過失殺傷ノ罪ト實決ノ罪
ト二罪俱ニ發覺スルハ實決ヲ以テ
重トナシテ論シ過失殺傷ノ收贖金ハ
追徴セスシテ可然ヤ左スレハ殺傷セ
ラルノ家ニ給スル埋葬金醫藥ノ資

○附條例

第七十條 凡罪ヲ犯シ實
斷贖罪並發スルニ罪各
等キ者ハ一ノ實斷ヲ以

ハ如何可仕哉 過失傷ノ收贖ト過誤
失錯ノ贖罪ト二罪俱ニ發覺スル時ハ
如何處決可仕哉
六年八月二十五日指令 第一條 過
失殺傷收贖ハ罪名ニ非ス二罪ト謂フ
可カラス故ニ實決ノ上殺傷ノ收贖ハ
法ノ如ク追給ス 第二條 第一條ノ
通心得ヘシ

テ論ス。若シ贖罪實斷ヨ
リ重キ者ハ。重キニ從ヒ。
贖罪ニ處ス。士族ノ破廉
耻甚テ犯ス者ハ。此例ヲ
用ヒス。

第七十一條 凡二罪以上
俱ニ發覺スレハ。一ノ重キ
者ヲ以テ論シ。各等キハ。
一ニ從テ科スト雖モ。其

贓物ノ追徵シテ。官ニ入
レ。主ニ給シ。若クハ。棄毀
器物ノ賠償ス可キ等ハ。
各本法ヲ盡ス。

第七十二條 凡二次以上
盜ヲ爲シ。首從ノ賊。並發
スル者ハ。首從ノ贓ヲ併
セテ。罪。一等ヲ減ス。若シ
併セテ。首賊ノ本罪ト。仍

ホ等キ者ハ。更ニ減セス。
假令ハ。從賊。五十圓ナル
ニ。首賊。四十圓ナレハ。之
ヲ併セテ。九十圓。懲役三
年。一等ヲ減シ。二年半ヲ
科ス。若シ首賊。百二十圓。
懲役十年ニ該ル者。從賊
ニ併セテ。罪。仍ホ等キ者
ハ。減セスシテ全科ス。

白川縣何 工喜悦七藏竊盜前額ノ罪
四十五圓十三錢七厘九十一錢一巳ノ
罪四十四圓二十二錢七厘從此節後
顯ノ從罪四十六圓一錢七厘五毛合九
十一圓三十一錢二厘改定律例二次盜
ヲ爲シ一次先ニ發シ巳ニ論決テ經テ
一次後ニ發シ及ロ先ニ審結シテ罪ヲ
盡サ、ル者云々更ニ加ヘテ全科スト
有之首罪ノ本罪者一圓以下ニ付從罪
ニ併セテ右ノ通九十一圓餘竊盜九十
圓以上懲役三年然所首從ノ罪並發ス
ルハ併セテ罪一等ヲ減スト云ニ依一
等ヲ減シ懲役二年半ニ可處所前額ノ
罪ヲ以テ杖一百餘ニ明治五年二月處
決相濟杖一十八折原杖法ニ依候ハ
徒三十日四合一酌七才ニ當リ百杖ハ
三百零四日一合七酌ニ相當リ徒二年
半ハ九百十二日半ト相成半日ヲ除去
シ九百十二日ヨリ已ニ處決スル三百

第七十三條 凡二次盜ヲ
爲シ。一次先キニ發シ。已
ニ論決ヲ經テ。一次後ニ
發シ。及ロ先キニ審結シ
テ。賊ヲ盡サ、ル者。論決
ノ後。發覺スレハ。俱ニ。後
發ノ賊ヲ以テ前賊ニ併
セ。罪。加フ可キ無ケレハ。
論ヒス。若シ併セテ。重キ

四日零ヲ除キ一年ト二百四十三日懲
役可申付哉

六年九月十日指令 窃盜罪四十圓餘
已ニ杖一百處斷ヲ經ルノ後尙ホ不盡
ノ罪四十圓餘發覺ス改定律例七十三
條ニ次盜ヲシテ一次先ニ發シ已ニ論
決ヲ經テ一次後ニ發シ云々若シ併セ
テ重キ者ハ更ニ加ヘテ全科スト云ニ
ヨリ併罪シテ九十圓餘懲役三年首從
ノ罪並發スル者併テ一等ヲ減シ二年
半已ニ決スル杖一百ヲ扣除シ剩ル日
數ヲ科ス

懲役二年ト八十二日

喜悅七歳

不盡ノ罪ニ係ル者ハ折杖法ノ用ヒ
千葉縣伺 改定律例第七十三條云々
トアリ假令ハ窃盜罪六十圓以上ナル
ヲ五十圓ト供認シ已ニ懲役一年論決
ヲ經其後限内カ或ハ役過スル後又窃

者ハ更ニ加ヘテ全科ス。

第七十四條 凡罪ヲ犯シ。

實斷、收贖、並發スル者ハ。

收贖折減法ニ照シテ、重

キニ從ヒ、實斷ニ處ス。假

令ハ、實斷ノ懲役十日ヲ

犯シ、又收贖ノ十年ヲ犯

セハ、十年ヨリ、五等ヲ減

シテ、懲役二年ニ實斷ス。

盜再犯罪一圓以下ノ罪ヲ犯シ不盡ノ

罪共發スレハ更ニ半年ト後犯ノ六十

日併セテ半年六十日ニ科シ又其罪一

百二十圓以上ナル者一圓以上罪ノ

ミナ供認シ懲役六十日處決ヲ經ル後

不盡ノ罪發覺スレハ更ニ懲役九年ト

三百五日ニ科シ可然哉 前條後犯ノ

罪准盜或ハ逃亡ノ類ニ係レハ二罪俱

發以重論例ニ依リ科斷シ可然哉

七年一月七日指令 伺之通 後條數

次ノ犯罪俱ニ發覺スルニ非レハ二罪

俱發ヲ以テ論ス可ラス本支ノ如キハ

前罪論決後ノ犯罪ニ係ル前犯ノ不盡

罪ハ改定律例第七十三條ニ依テ處分

シ後犯ノ罪ハ仍ホ律ニ依テ科斷ス可

シ

○

濱松縣伺 凡士族終身禁錮ノ閏刑ヲ
犯シ又懲役百日以下ノ破廉耻甚ナキ

實斷ノ五十日ヲ犯シ、又

收贖ノ百日ヲ犯セハ、百

日ヲ折半シテ、五十日、罪

仍ホ等シ、實斷ノ五十日

ニ處スルノ類。

第七十五條 凡華士族、破

廉耻甚ノ懲役百日以下

ヲ犯シ、又閏刑ノ禁錮一

年以上ヲ犯シ、二罪俱發

シニ罪俱發スレハ一ノ破廉耻甚ニ依
リ科斷シ候哉
六年八月十八日指令 何之通
白川縣伺 二罪俱發ノ時其一ハ違式
註違等ノ罪ニ係ルハ二罪俱發ノ例ニ
無之各別ニ處分ス、シト云々陸軍裁
判所へノ御回答相見候所若シ違式ノ
罪ヲ一同ニ犯スコト二條以上著クハ違
式ト註違トノ罪俱ニ發マル時ハ如何
處分可然哉
七年六月十五日指令 各別ニ處分ス
ヘシ

スレハ。一ノ破廉耻甚チ
以テ。重ト爲シテ論ス。
犯罪共逃
凡罪ヲ犯シ。共ニ逃亡スル
ニ。其輕罪ノ囚能ク重罪ノ
囚ヲ捕獲シテ首告シ。及ヒ
罪相等キ者能ク同逃一半
以上ヲ捕獲シテ首告スレ
ハ。全ク其罪ヲ免ス。人ヲ損

傷シ。及ヒ姦スル者ハ。免サ
ス。
其人ニ因リ。連累シテ。罪ニ
致シ。正犯罪人自死スル者。
連累人ハ。本罪ニ二等ヲ減
スルコトヲ聽ス。若シ罪人自
ラ首告シ。及ヒ恩赦ニ遇テ。
原免セラレレハ。連累人モ。
亦原免ス。減罪スレハ。連累

辛未十月八日御布告 凡百般ノ公事同僚連署シ施行フ故ニ同僚公罪遞減ノ律アリ然ル處連署ノ法或ハ行ハレハ公事失錯アルトキハ職ニ預シタル者迄モ進退相伺或ハ長官ノ進退相伺ノ向モ有之所由分明ナラス甚不都合ノ至リニ付以來大小ノ事務長官以下各連署シテ施行シ若失錯アレハ處由同對テ分別シ連署セシモノ而已進退伺書差出シ候様可致事
京都裁判所附 滋賀縣何御指令ニ同僚犯公罪主典檢點シテ失アレハトハ假令ハ文書ヲ施行スルニ主典誤寫シ長次官改正スヘキニ檢點ニ失シ准行スルナ云フ則差錯主典ニ由ル故ニ主

人モ亦減罪スルヲ聽ス。
同僚犯公罪

凡同僚ノ官吏文案ニ連署シ。公罪ヲ犯ス者ハ。長官ヲ一等ト爲シ。次官ヲ一等ト爲シ。判官ヲ一等ト爲シ。主典ヲ一等ト爲シ各所由ヲ以テ首ト爲ス。假令ハ。主典檢點シテ。失アレハ。即チ主

典ヲ以テ所由トナス判官事ヲ斷シテ失アレハトハ縱令ハ主典起案シ罪ヲ斷シテ失ナキニ判官之ヲ檢點ニ當リ罪名ヲ改貼シテ失錯アルヲ云フ則差錯判官ニ由ル故ニ判官ヲ以テ所由ト爲ストアル所若シ主典罪ヲ斷シテ錯誤アルニ判官改正改貼セスシテ准行スルモ仍ホ主典ヲ以テ所由ト爲ス可キ哉
六年八月二十五日指令 何之通主典ヲ以テ所由トナス
圖九年四月十四日第四十八號御布告 此律ヲ廢ス

典ヲ以テ首ト爲シ。判官ヲ第二從ト爲シ。次官ヲ第三從ト爲シ。長官ヲ第四從ト爲ス。若シ判官事ヲ斷シテ。失アレハ。判官ヲ以テ首ト爲シ。次官ヲ第二從ト爲シ。長官ヲ第三從ト爲シ。主典ヲ第四從ト爲シ。各一等ヲ遞減ス。原設四等官ノ内缺

員アルモ。亦四等ニ依リ。遞減シテ。罪ヲ科ス。原設ノ官吏。若シ四等ナキ者ハ。止タ現設ノ官員ニ依テ遞減ス。若シ同僚官一人私ヲ挾ミ。故サラニ人ヲ罪ニ出入スル者ハ。故出入人罪律ニ依テ論シ。其餘文案ニ署スト雖モ。情ヲ知フサル者ハ

止タ失出入人罪律ニ依テ論シ。上ノ遞減法ニ照シテ。之ヲ科ス。

○附條例

第七十六條 凡府縣官吏ハ。知事及ヒ令ヲ長官ト爲シ。參事ヲ次官ト爲シ。典事ヲ判官ト爲シ。屬以下ヲ主典ト爲ス。其公罪

辛未十一月二十七日司法省伺 律ニ同僚犯公罪者ハ四等ト爲ニテ遞減ス。其原設官吏四等ナキ者ハ止タ現設ノ官員ニ依テ遞減スト有之先般府藩縣官員降法奉伺候處
長官知事 次官大參事
判官少參事 主典屬
右之通御沙汰相成居候然ルニ今般地方官職員御改正ニ付テハ如何區分遞減可仕哉

御朱書 長官 府知事 次官 參事

判官 典事 主典 屬

右之通可相心得事

宮崎縣伺 律例第七十六條ニ典事ヲ

判官ト爲シ屬以下ヲ主典ト爲ス云々

爾後典事ヲ被廢大屬昇級更ニ中屬被

置候ニ付テハ屬ヲ兩岐ニ別テ大屬ヲ

判官ト爲シ中屬以下ヲ主典ト爲シテ

宜布候哉

七年一月九日指令 明治六年第四百

三十四號御布告ノ通心得可シ

補六年十二月廿八日第四百三十四號

御布告(輪廓附) 改定律例第七十六

條左ノ通改正候條此旨布告候事

凡府縣官吏ハ知事及ヒ令ヲ長官ト爲

シ參事ヲ判官ト爲シ屬ヲ主典ト爲ス

其公罪ヲ犯ス者ハ此例ニ依リ遞減シ

テ罪ヲ科ス

ヲ犯ス者ハ此例ニ依リ

遞減シテ罪ヲ科ス。

第七十七條 凡主典、罪囚

ノ口供結案ヲ具題シ判

官、律ニ依テ、刑名ヲ擬斷

スルニ、刑名、口供ト、差錯

セスト雖モ、覆審シテ、罪

ノ當ラサルコトヲ檢舉ス

レハ、刑名ノ錯ハ、口供ノ

誤ニ由ルヲ以テ、罪、但々

所由ノ主典ヲ坐シ、判官

ハ、公罪、遞減法ヲ用ヒス。

公事失錯

凡官吏、公事ヲ失錯シ、改正

ス可キハ、事ニシテ、未タ發

露セサルノ時、自ラ覺舉ス

ル者ハ、自首ト同ク、其罪ヲ

免ス、自ラ覺舉セスト雖モ、

自覺舉、即
自首也、故
免罪同條
免罪、猶得
相容隱之

文案ニ同署スル者一人云々

同 新庄厚信

同 關九年四月十四日第四十八號御布告
此律ヲ廢ス

岡山縣典事東馬安太實屬士族取扱主
務中辛未年渡濟ノ分ハ壬申年ノ家祿
ト具狀上申ノ進退伺ノ擬律、六年九月
名例律公事失錯云々

東馬安太

親屬爲首
彼以情常
相慰此以
義常相糾
故覺舉者
同得免罪
輯註

其長官以下。主典以上。文案
ニ同署スル者。一人自ラ覺
舉スレハ。餘人ハ。皆罪ヲ免
ス。

其罪ヲ斷シテ。入ルニ失錯
シ。已ニ處決スル者ハ。自ラ
檢舉スト雖モ。仍ホ失入人
罪律ニ依テ之ヲ科シ。此律
ヲ用ヒス。其人ヲ罪ニ失出

六年二月二十七日第七十三號御布告
公事失錯條改正(即律例第七十八條ノ

スルハ。已ニ決放スト雖モ。
能ク自ラ檢舉シテ。貼斷ス
ルヲ得ル者ハ。其失出ノ
罪ヲ免ス。若シ檢舉スト雖
モ。貼斷スルヲ得サル者
ハ。仍ホ失出人罪律ニ依テ
之ヲ科ス。

○附條例

第七十八條 凡人ヲ罪ニ

通

失出スル者ハ已ニ決放
スト雖モ貼斷スル律ヲ
改メ能ク檢舉スト雖モ
貼斷スルヲ用ヒス仍
ホ失出_ト人_ト罪_ト律ニ依テ之
ヲ科ス。

共犯罪分首從

凡共ニ罪ヲ犯ス者ハ造意
一人ヲ以テ首トナシ隨從

筑摩縣伺 別居ニ係ル父子兄弟等共
ニ罪ヲ犯ス者本條一家共犯罪ニ依ル
可キ者ハ止々尊長ヲ坐シ卑幼ハ論ヒ
ス候テ可然該殺一家三人條例中同居
セスト雖モ父子兄弟等至親ニ係ル者
皆是ナリト相見候間右體至親ニ係ル
者ハ各居ト雖モ共犯罪ニ依ル可キ儀
ニモ可有之哉
六年 月 日指分 各居ノ者ハ一家
共犯ノ限ニ在ラス殺一家三人條例ト
同シカラス
濱田縣伺 名例律共犯罪分首從條ニ
婦人ノ尊長ハ首タリト雖モ仍ホ卑幼
ノ男夫ヲ坐スト有之候へ共若此男夫
十五以下ニ候へハ婦人ヲ坐シ候哉
七年二月二十八日指分 伺之通

者ハ從ト爲シ一等ヲ減ス。
若シ一家人共ニ罪ヲ犯セ
ハ止々尊長ヲ坐シ卑幼ハ
論セス。若シ尊長年八十以
上及ヒ篤疾アレハ共犯ス
ル。其次ノ尊長ヲ坐ス。婦人
ノ尊長ハ首タリト雖モ仍
ホ卑幼ノ男夫ヲ坐ス。
其盜罪及ヒ枉法不枉法若

男夫猶云
男子女夫
増註

京都裁判所伺 父罪アリ其子代テ刑
ヲ受ルハ相成ナル處一家共犯ノ罪律
ヲ按シテ其父ヲ坐スルニ父病羸ヲ哀
ニ其子代ンコト願フ者ハ之ヲ許シテ
可然哉

七年一月十五日指令 父子共ニ罪ヲ
犯スニ父篤疾ニ罹ルルハ其子ヲ坐ス
ルニ首タルノ罪ヲ以テス可シト雖モ
本文ノ如ハ代罪ヲ聽スノ限ニアラス
律ニ依テ科斷ス可シ

クハ鬪毆殺傷等父子同ク
犯スハ並ニ凡人首從ノ法
ニ依ル。
若シ共ニ罪ヲ犯シテ首從
ノ本罪各別ナル者ハ各本
律ノ首從ニ依テ論ス。假令
ハ。甲。他人ヲ引テ共ニ兄ヲ
毆テハ甲ハ弟毆兄律ニ依
リ。他人ハ凡人鬪毆ニ依テ

皆者不分
首從一等
科罪八字
皆者樂也
齊而一之
無分別也
不行分別
惟概其罪

論ス。又卑幼外人ヲ引キ已
レノ家ノ財物ヲ盜メハ卑
幼ハ私擅用財律ニ二等ヲ
加ヘ。外人ハ凡盜ノ從ニ依
テ論スルノ類。

若シ本條内ニ皆ト言フ者
ハ。首從ヲ分タス。一體ニ之
ヲ坐シ。皆ト言ハサル者ハ。
首從ノ法ニ依ル。

而同之故
日貨八字
例釋

各者彼此
同科此罪
八字各者
例義各者
各從其類
義取乎別
也萬類不

○ 附條例

第七十九條 凡本條ニ。皆
ト言ハスト雖モ。脱籍。越
獄。及ヒ犯姦。若クハ。懲役
人逃等。身自ラ犯スヲ以
テ。罪ヲ得ルニ係ル者ハ。
並ニ。首從ヲ分タス。各本
科ニ處ス。
第八十條 凡一家人。共ニ

齊品流各
別比類而
觀實同一
致故用各
字以別之
八字
例釋

犯罪事發逃亡

寶貨ヲ偽造スル者ハ。一
家共犯律ニ依リ。止々尊
長ヲ坐シ。卑幼ハ論セス。
凡二人。共ニ罪ヲ犯スニ。一
人逃亡シテ。現ニ獲ラルハ。
者。其逃亡スル者ヲ。首謀ト
稱シテ。更ニ證據ナケレハ。
其稱スル所ニ據リ。獲ラル

者ヲ從罪ニ決ス。後ニ逃
 者ヲ獲テ鞫問スルニ。前獲
 ノ者。還テ首ナレハ。前決ノ
 罪ニ通計シテ。後問ノ數ニ
 充テ。後獲ノ者ハ。從ニ照シ
 テ。之ヲ科ス。
 若シ罪ヲ犯シ。事發シテ逃
 亡スルニ。現在衆犯ノ證據
 アリテ。其首從明白ナレハ。

此條當與
 犯罪自首
 于名犯義
 知情藏匿
 罪人三條
 參看同財
 同居親屬
 不限籍之
 同異雖無
 服者亦是
 也註

獄已ニ成ルニ同シ。後ニ獲
 ルト雖モ。原擬ニ依テ決罰
 シ。更ニ贖對ヲ用リス。

親屬相爲容隱

凡同居ノ親屬。若クハ別居
 三等以上ノ親屬。及ヒ外祖
 父母。外孫。妻ノ父母。女婿。若
 クハ孫ノ婦。夫ノ兄弟。及ヒ
 兄弟ノ妻。並ニ罪ヲ犯シテ。

新世村刑律
 卷二 親屬相爲容隱

家長不得
為奴婢雇
工人隱者
義當治其
罪也增註
琦玉裁判所伺 凡家長雇人、為ニ容
隠ヲ許ス義律ニ不相見候へ共雇人家
長ノ為ニスルノ權衡ニ反照スレハ是
又論セステ可然哉
七年八月廿五日指令 家長雇人ノ為
ニ容隠スルハ勿論ニ置シ可ラス

各居小功
以下本宗
外姻之親
其服既輕
其分漸疎
故容隱及
漏泄各減
凡人三等
云々此皆
本手人情
原于天理
所以厚風
俗而致人
倫紀律之

相容隠シ。奴婢雇人。家長ノ
為メニ容隠スル者ハ。皆論
スルコト勿レ。
若シ官司ノ追捕ヲ偵知シ
テ。其事情ヲ漏泄シ。或ハ消
息ヲ通報シ。罪人ヲシテ。隠
避セシムル者モ。亦罪ニ坐
セス。其別居四等以下ノ親
屬。相容隠シ。及ヒ事情ヲ漏

情義也。增註

泄スル者ハ。各凡人ニ。三等
ヲ減ス。

○附條例

第八十一條 凡祖父母ト
稱スル者ハ。曾高同シ。孫
ト稱スル者ハ。曾玄同シ。
嫡孫承祖ハ。父母ト同シ。
子ト稱スル者ハ。男女同
シ。

諸律本條
與名例不
同者多恐
無所適從
故特立此
條轉註
名例者諸
律之凡例
本條者斷
罪之正法

滋賀縣例 本條別有罪名條本條別ニ
罪名アリテ名例ト罪同シカラサルハ
本條ニ依リ之ヲ科ストハ縱令ハ共犯
罪分首從條ニ依レハ盜罪枉法不枉法
闘毆殺傷等ヲ除ク外其餘ノ罪ハ皆一
家共犯ノ例ニ依リ止マ會長一人ヲ坐
シ身幼ハ論セスシテ可然ニ似タレ共

第八十二條 凡異籍ノ親
屬共居同爨シ若クハ產
ヲ破リ寄食シテ恩養ヲ
受ル者ハ俱ニ同居親屬
ヲ以テ論ス。
本條別有罪名
凡本條別ニ罪名アリテ名
例ト罪同カラサル者ハ本
條ニ依テ之ヲ科ス。

律文簡要
不欲重述
凡本條有
者皆統于
名例也然
有權衡于
輕重之間
變名例之
例而自有
罪名者則
又不拘名
例故本條
有與名例
不同者自
依本條科
斷其如同
謀其毆條
之類毆條
規者有所
龜求之意
避者有所

親屬相姦ノ如キハ本條ハ各ノ字アル
ニ依リ本條ニ依テ之ヲ科シ一家共犯
ノ例ヲ用ヒサル等ノ事ヲ申ス儀ニテ
賭博ノ如キモ亦本條ニ管杖八十トア
ルニ依リ本條ニ依テ之ヲ科シ一家共
犯ヲ以テ論スル限ニアラスト相心得
居候處昨六年十一月中京裁判所ヨ
リ伺御指令ニハ賭博ハ一家共犯ヲ以
テ論スト有之本條別有罪名條ト矛盾
スルニ相似タリ
七年五月廿九日指令(前略)賭博條皆
杖八十トハ凡人ノ賭博スル者ヲ謂フ
本條中賭博ノ一家共犯ニ係ルヲ治ス
ルノ罪名ナシ且賊盜闘毆等ノ如クハ
テ侵損スル者ト同シカラス故ニ名例
ニ依リ一家共犯ヲ以テ論ス本條別有
罪名條ト矛盾スルニ非ス

若シ本條罪名アリト雖モ
其心規避スル所アリテ本
罪ヨリ重ケレハ其重キ者
ニ從テ論ス其罪本重カル
ヘクシテ犯ス時知ラサル
者ハ凡人ニ依テ論ス假令
ハ叔姪別處ニ生長シテ素
相識ラス姪叔ヲ打傷シ官
司推問シテ始テ其叔ナル

脱却之謂
求取賄賂
曰規脫免
罪名曰避
規與窺同
古字通用
輯註

ヲ知レハ止タル人鬪法ニ
依ル。又別處ニ竊盜シテ大
祀神御ノ物ヲ偷得ル如キ。
並ニ犯ス時知ラサレハ止
々凡盜律ニ依テ論ス。其罪
本輕カルヘキ者ハ。本法ニ
從フヲ聽ス。假令ハ。父子
ヲ識ラス。毆打ノ後始テ子
ナルヲ知ル者ハ。止々父

打子法ニ依ル。凡毆ヲ以テ
論ス可ラス。

加減罪例

凡加ト稱スル者ハ。本罪上
ニ就テ加重ス。假令ハ。笞四
十ヲ犯スニ。一等ヲ加フレ
ハ。笞五十ニ坐シ。杖一百ハ。
徒一年ニ坐シ。徒三年ハ。流
一等ニ坐シ。流一等ハ。流二

等ニ坐スルノ類。
減ト稱スル者ハ。本罪上ニ
就テ減輕ス。假令ハ。笞五十
ヲ犯スニ。一等ヲ減スレハ。
笞四十ニ坐シ。徒一年ハ。杖
一百ニ坐シ。徒三年ハ。徒二
年半ニ坐スルノ類。
惟二死三流ハ。各同ク一減
ト爲ス。假令ハ。死罪ヲ犯ス

ニ。一等ヲ減スレハ。絞斬ヲ
分タス。流三等ニ坐シ。流罪
ヲ犯スニ。一等ヲ減スレハ。
徒三年ニ坐スルノ類。
加スル者ハ。數滿テ乃坐ス。
凡兩數。日數。人數。器物。地畝
ノ數。皆必ス其數ニ滿ツル
ヲ計リテ。乃始テ坐ス。
加等罪ハ。流三等ニ止ル。加

本條即本條別有罪名也。本條有加入于死即從本條無死罪之文。本條方引此律罪此加至滿流而不得加入于死者所加之罪又有減等即以所加徒流上減之亦不得加入

壬申十一月廿八日第三百七十六號御布告改正

同年十一月九日司法省三流一減法改正伺 名例律曰二死三流ハ各同ク一減トナス其故何ヤ二死ニ斬絞ノ異アリト雖モ死者復生ス可ラス斷者又續ク可ラサル一ナリ三流ニ役ノ長短アリ地ノ遠近アリト雖モ其往テ復ルテ

ヘテ死ニ至ルヲ得ス。若シ本條加ヘテ死ニ入ル者ハ。本條ニ依テ加フルモ。加ヘテ絞ニ入ル。斬ニ至ラス。

○附條例

第八十三條 凡三流同ク一減ト爲ス律ヲ改メ。懲役三年以下ト同ク分テ三等ト爲シテ減ス。其二

得サル一ナリ故ニ二死ニ等ラ減スレハ斬絞ヲ分タス流三等ニ坐シ以テ性命ヲ保全セシメ流三等ヲ減スレハ三流並ニ徒三年ニ坐シ限滿テ郷里ニ還ルヲ得セシム死流減法ノ深意此ノ如シ然ルニ新律流刑ヲ三等ニ分ツト雖モ方法未ダ定ラサレハ姑ク准流法ト設ケ五年七年十年ノ徒役ニ服シ限滿テ郷里ニ放還ス然則彼ノ往テ復テ得サルノ眞流ト全日ニ論シ難シ宜ク徒刑ト一例視シ名例ヲ改正シ三流ヲ分チ三減トナシ以テ罪犯徒減ヲ得ル勿ク刑法允當ナラシメント要ス官議如此依テ律案並準流限内老疾収贖圖云々ヲ添欽テ定奪ヲ仰ク

御朱書 伺之通

死ノ減法ハ。仍ホ本律ニ依ル。

第八十四條 凡懲役終身ハ。死刑ノ一部ニ準スト雖モ。其加減ノ法。二死ニ通シテ。同ク一減ト爲スヲ得ス。假令ハ。死罪ヲ犯スニ。一等ヲ減スレハ。絞斬ヲ分タス。懲役終身ニ

若松縣 凡犯罪年ヲ歴テ云々トハ警
ハ懲役終身ニ該ル罪ヲ犯シ逃亡シテ
十年ノ後ニ至リ捕縛スト雖モ罪犯ノ
發覺十年ノ前ニ在ルモノハ舊惡ヲ以
テ論セス矢張懲役十年可申付哉
六年八月四日指令 伺之通
東京裁判所伺 犯罪年ヲ歴テ發覺ス

坐ス。若シ本條加ヘテ死
ニ入ル者ハ。改テ一體ニ
懲役終身ニ止ム。其監守
常人盜。私借官物。及ヒ雇
人盜。家長財物者ハ。此限
ニ在ラス。

第八十五條 凡罪ヲ犯シ
年ヲ歴テ。發覺スル者ハ。
並ニ舊惡ヲ以テ論シ。舊

ル者ハ舊惡減免例圖ニ照シテ減等或
ハ免罪スル事ヲ聽スト雖モ縱令ハ三
次盜ヲ犯ス者一次ハ三年以外一次ハ
三年以内ニ在ル如キ者モ三年以外ノ
罪ハ除去シ三年以内ノ罪ノモチ以テ
罪ヲ斷シ可然哉又ハ右体ノ者ハ罪ヲ
併セ罪ヲ論シ候儀ニ御座候哉
六年 月 日指令 三年以外ノ罪ハ
除去シ三年以内ノ罪ノミチ以テ科斷
ス可シ 但シ罪ノ追ス可キハ追シテ
事主ニ給ス
京都裁判所伺 舊惡減免例凡犯罪云
々トアルハ縱令ハ賭博罪ヲ犯シ三年
ノ後發覺スルモノヲ謂フニテ其三年
内發覺スルニ係ラハ罪ヲ斷スル三年
外ニ在リト雖モ減免ノ限ニ在ラサル
カ
六年八月十二日指令 舊惡ヲ以テ論
スル限ニアラス

惡減免例圖ニ照シテ。區
處スル下ヲ聽ス。若シ事
ノ改正ス可ク。贓ノ追徵
ス可キ等ハ。罪ヲ免スト
雖モ。仍ホ追究明白シテ。
各本法ヲ盡ス。其謀故殺
ヲ犯ス者ハ。此限ニ在ラ
ス。

再犯加等罪例

椽木裁判所何ノ指令 六年九月五日 脱籍逃
亡ハ舊惡減免例ノ限ニ在ラス

六年七月廿四日第二百六十七號御布
告制定條例

再犯加等罪例

凡監守及ヒ常人盜再ヒスル者ハ窃盜
ト同ク並ニ後犯ノ本罪ニ一等ヲ加フ
和歌山縣何 初犯監守盜ニシテ再犯
窃盜或ハ初犯窃盜ニシテ再犯常人盜
ナル者各初犯ヲ以テ論シ本罪ニ一等
ヲ加可然哉 强窃盜相交リ財ヲ得ル
三犯以上ニテ懲役十年ヨリ輕キ者窃
盜三犯五十圓以下ノ權衡ニ依リ處斷
致シ可然哉
七年一月十九日指令 第一條 何之
通 第二條 初犯强盜ニシテ再犯窃
盜ナル者及初犯窃盜ニシテ再犯强盜
ナル者三犯窃盜ナレハ竊盜三犯ヲ以

凡竊盜及ヒ賭博ヲ犯シ已
ニ官司ノ斷決ヲ經テ再タ
ヒ犯ス者ハ並ニ後犯ノ本
罪ニ一等ヲ加フ其賊ヲ計
ルハ初犯ノ賊ニ通算シテ
科ノスルヲ得ス若シ初犯
ノ罪赦前ニ在ル者ハ再犯
ト雖モ仍ホ初犯ヲ以テ論
ス

テ論シ三犯强盜ナレハ强盜再犯ヲ以
テ論シ其初犯再犯窃盜ナル者ト雖モ
三犯强盜ナレハ强盜再犯ヲ以テ論ス
三瀨縣何 盜罪假令ハ初メ竊盜ニテ
決放後又常人盜カ若クハ雇人家長ノ
財物ヲ盜ハ者ハ初犯竊盜ニシテ再犯
强盜云々一等ヲ加フノ例ニ依リ並ニ
後犯罪ニ一等ヲ加ヘ可處刑處猶又窃
盜又ハ常人盜若クハ雇人家長財物
ハ前後ノ罪名異ナリト雖モ都合三犯
ニ付テハ五十圓以下ハ竊盜三犯ト同
ク論シ可然哉

七年一月廿八日指令 初犯竊盜ニシ
テ再犯常人盜及家長ノ財物ヲ盜ハ者
初犯ヲ以テ論ス可シト雖モ後犯ノ罪
ニ一等ヲ加フ三犯竊盜及ヒ常人盜若
クハ家長ノ財物ヲ盜ハ者並ニ窃盜三
犯ヲ以テ論ス賊重キハ重ニ從テ論ス
千葉裁判所何 名例律再犯加等罪例

其初犯强盜ニシテ再犯竊
盜ナル者及ヒ初犯竊盜ニ
シテ再犯强盜アル者ハ再
犯ト雖モ仍ホ並ニ初犯ヲ
以テ論シ一等ヲ加フ
若シ徒限内ニ在テ逃走ス
ル者ハ律ニ依リ罪ヲ科ス
ト雖モ外ニ在テ又罪ヲ犯
ス者徒罪以下杖笞ニ至ル

條竊盜ヲ犯シ云々後犯ノ罪ニ一等ヲ加フトアルハ凡人竊盜ニ限リ其各居
 五等ノ親財物ヲ相盜ム者ハ再犯ト雖
 モ加等セサル哉
 七年一月十八日指令 親屬竊盜ニ係
 ル再犯ハ加等ス
 團二重縣伺 初犯再犯親屬相盜ニシ
 テ二犯真竊盜ナル者ハ再犯加等罪例
 第二項ニ照依シ仍ホ竊盜初犯ヲ以テ
 論シ一等ヲ加ヘ候哉
 八年四月十三日指令 竊盜初犯ヲ以
 テ論シ加等ノ限ニ在ラス

マテ。並ニ徒一等ヲ加フ。加
 ヘテ四年ニ過ル者ハ。流ニ
 入レ。再逃スル者ハ。本律ニ
 依テ。之ヲ科ス
 其先キニ罪ヲ犯シ。未タ論
 決セスシテ。監獄ニ在リ。脱
 越スル者ハ。律ニ依リ罪ヲ
 科スト雖モ。外ニ在テ。又罪
 ナ犯ス者ハ。前後二罪ノ重

戊辰九月 日御布告 今般御即
 位御大禮被爲濟改元被仰出候ニ付テ
 ハ天下之罪人當九月八日迄ノ犯事逆
 罪故殺並犯狀難差免者ヲ除クノ外都
 テ減一等被赦候事 但犯狀難差免者
 ノ府藩縣ヨリ口書ヲ以テ刑法官ヘ可
 伺出事
 兵庫裁判所伺 一等赦前既ニ再犯ノ
 刑ニ處セラレ赦後三犯スル時ハ五十
 圓上下ヲ分チ其本罪ヲ擬シ仍ホ一等
 ナ減シ可然哉 竊盜再犯ノ時從贓

キ者ニ。從ヒ。二等ヲ加フ。賊
 罪ニ係ル者ハ。賊ニ計ヘ。通
 計合算シテ。二等ヲ加フ。

○附條例

第八十六條 凡減一等赦
 前後ニ。盜ヲ犯ス者ハ。赦
 後ノ贓ヲ以テ。赦前ノ贓
 ニ併セ。罪。一等ヲ減ス。若
 シ併セテ。赦後ノ本贓ト。

ナレハ一等ヲ減シタル上ニテ再犯一
 等ヲ加ヘ候儀ト存シ可然哉
 七年四月二日指令 第一條 一等赦
 前後ノ竊盜罪一時并發スル時ハ併罪
 シテ減等スルヲ聽ス即改定律例第八
 十六條ニ明文アリト雖モ其犯數ニ係
 ル者再犯ノ罪赦前ニ在ルヲ以テ赦後
 三犯ノ本罪ニ減等スルヲ聽ケス赦
 後再犯ニ係ル者モ亦同シ 第二條
 竊盜再犯ハ首從ヲ分ツ即チ一等ヲ減
 スルノ上再犯ノ一等ヲ加フ可シ其三
 犯以上ハ首從ヲ分タス律ニ依テ處分
 ス

罪等キ者ハ減セス例首
 從賊並發者ト同シ
 第八十七條 凡徒限内ニ
 逃走シ外ニ在テ又罪ヲ
 犯ス者徒罪以下杖笞ニ
 至ルマテ並ニ徒一等ヲ
 加フル律ヲ改メ懲役人
 逃條例ニ依テ科斷ス
 稱乘輿車駕

與同罪者
 本皆無罪
 之人因人
 連累者也

凡乘輿車駕及ヒ御ト稱ス
 ル者ハ太皇太后皇太后皇
 后並ニ同シ詔ト稱スル者
 太皇太后皇太后皇后及ヒ
 皇太子ノ令ハ並ニ一等ヲ
 減ス

稱同罪

凡同罪ト稱スル者ハ止タ
 其罪ニ坐ス正犯死ニ至ル

稱乘輿車駕 稱同罪

正犯之罪、輕重不一、連累之罪、准以科之、故有同罪之法、律稱同罪、有數項、云々、又、有言罪、同者、語意雖同、而實異、此同罪者、即之所犯、即照彼之罪、名科之、而犯罪之、則異也、罪則者、謂推其過惡、情與相類、權其輕重、實與相等、不罪既同、不

者、同罪者ハ、一等ヲ減シ、罪流三等ニ止ル。惟タ正犯ノ財ヲ受ケ、故縱スル同罪者、正犯、死ニ至レハ、同罪者ハ、絞ニ處ス。其罪同ト稱スル者ハ、死ニ至ルモ、減等セス。枉法ニ準シテ論ス、盜ニ準シテ論スト稱スル等ハ、但タ其罪ニ準シ、亦罪流三等

必更論故、稱罪同者、至死不減、等也、增註、准者、與、真犯有間用、此准彼也、所犯情與、事不同而、跡實相涉、算爲前項、所犯惟合、其罪而不、衆如其實、故曰、准、字、以者、與、真犯同、謂、如、監守、貿易、

ニ止ル。
枉法ヲ以テ論ス。盜ヲ以テ論スト稱スル等ハ、皆正犯ト同シ。絞斬モ、本律ニ依テ之ヲ科ス。
○附條例
第八十八條 凡正犯ノ財ヲ受ケ、故縱スル同罪者、正犯、死ニ至レハ、同罪者

新律附例卷之三
稱同罪

官物無異
實盜故以
枉法論以
盜論罪至
斬絞並全
科八字
以者非真
犯也非真
犯而情與
真犯同如
真犯之罪
罪之故曰
以八字例
釋

大坂裁判所何 初メ准窃盜ヲ犯シ處
刑ヲ經テ猶又真窃盜ヲ犯ス者有之右
ハ初犯ヲ以テ論シ候哉將テ再犯ヲ以
テ論シ候哉
六年八月二日指令 盜ニ準シテ論ス
ル罪ハ犯數ニ計ヘス
〔翻〕二重懲伺 律例云々トアルハ真盜
罪初犯ニ在ルルノ例ト心得候然ルニ
其初犯準盜ヲ以テ論決テ經ルノ後再
犯以上仍ホ準盜罪（假令ハ初犯盜田
野藪麥條ニ依リ科斷シ再犯亦尙ホ然
ルノ類）ヲ犯ス者ハ都度初犯ヲ以テ
論シ加等ヲ用ヒス候哉
八年四月十二日指令 何之通

ハ。絞ニ處スル律ヲ改メ。
懲役終身ニ從フ。
第八十九條 凡盜ニ準シ
テ論スル罪ハ。犯數ニ計
ヘス。罪。懲役十年ニ止ル
第九十條 凡詐欺恐喝取
財等。盜ニ準スル罪。士族
ハ。破廉耻甚ヲ以テ論ス
其棄毀器物等。盜ニ準シ。

及ロ枉法ニ準スル罪ハ。
破廉恥甚ノ限ニ在ラス。

稱ニ監臨主守

凡監臨ト稱スル者ハ。内外
諸司。其所屬ヲ統攝シテ。監
察臨蒞シ。一切ノ文案ニ。相
關涉シ。及ヒ所管ノ民庶ニ
非スト雖モ。其公務ヲ帶管
シ。事權手ニ在リ。專制已レ

首節、是常
時之監臨
主守、次節、
是替時之
監臨、主守
輯註

ニ由ル者、並ニ監臨ト爲ス。
主守ト稱スル者ハ、内外諸
司ノ吏典、及口庫子、獄卒等、
專ヲ其事ヲ主掌看守スル
者、並ニ主守ト爲ス。
其職、統攝ニ非スト雖モ、臨
時ニ差遣セラレテ、管領提
調スル者モ、亦監臨ト爲ス。
其事ヲ專掌スル者モ、亦主

守ト爲ス。

稱日者以十二時

凡一日ト稱スル者ハ、十二
時ヲ以テス。エテ計ル者ハ、
朝ヨリ暮ニ至ル。一年ト稱
スル者ハ、三百六十日ヲ以
テス。人ノ年ヲ稱スル者ハ、
戸籍所注ノ年ヲ以テ定ト
ナス。歳ト稱スル者ハ、三人

稱日者以十二時 稱日者以二十四時條例

六年二月九日第四十五號御布告制定

條例

稱日者以二十四時

凡月ト稱スル者ハ三十日ヲ以テシ
半年ト稱スル者ハ六個月ヲ以テス
閏年ノ徒限内ニ在ル者ハ一日ヲ加算ス
兵庫裁判所伺 改定律例第九十一條
半年ト稱スル者ハ六個月ヲ以テス

以上謀ト稱スル者ハ二人
以上其謀狀顯跡アル者ハ
一人ト雖モ二人ノ法ニ同

○稱日者以二十四時

條例

原稱日者以
十二時律

第九十一條 凡一日ト稱

スル者ハ十二時ヲ以テ
スル律ヲ改メ二十四時

有之候所一個年ノ内第六月前後ニ因
テ前半年百八十一日ト後半半年百八十
四日ニシテ日數三日ノ差アリ右月ヲ
以テ計算スル時ハ如何處分可仕哉
前條ノ如ク半年ト稱スル者ハ懲役日
限ノ算スル等實地上ニ付テ之カ辨フ
ナモハ日數百八十日ト見做シ候モ妨
ナキ哉ニ相考候ハ其年七十以上十五
以下ノ年ヲ算スル總令ハ前年第四月
三十日ニ出生シタル者翌年第三月一
日ニ至レハ即チ十二個月ニ亘ルヲ以
テ滿一年トナスト雖モ日數ヲ以テ算
スレハ其實三百三十日許ナリ推テ十
五年七十年ニ至ルモ亦終ニ其不足ヲ
補フ可ルヲ殊ニ一昨年十二月ヲ以
テ一個月ニ充テ候ハ合テ八十餘日
ノ不足アリ年ト稱スルノ律例ト違反
耳ナラス事理ニ於テ甚不都合ト存候
右ハ如何ノ次第可有之哉 逃亡二年

ト爲シ一年ト稱スル者
ハ三百六十日ヲ以テス
ル律ヲ改メ三百六十五
日ト爲シ閏年ハ一日ヲ
加算シ半年ト稱スル者
ハ六個月ヲ以テス。
第九十二條 凡年七十以
上十五以下ト稱スル者
ハ生年本年ノ月數ヲ

以外及ヒ舊惡減免ノ三年ヲ經ル其一年ハ三百六十五日ト相心得居候所前二箇條ノ如ク日ヲ以テセス月ヲ以テ算スル儀モ有之如何可相心得哉 但逃亡者ハ日ヲ以テ算シ其刑期ヲ緩ニスル方至當ト相考候、其舊惡ハ月ヲ以テ算スル方其減免ヲ速ニスルノ際ニテ兩歧ニ跨リ何レニ適從可然哉
七年四月十五日指令 第一條 一月ハ三十日ヲ以テ算ス一箇年ノ内六箇月前後ニ日數ノ差アルモ妨ナシ 第二條 懲役ノ年月日限ハ律例第四條并ニ明治六年第四十五號御布告ニ照シテ計算ス老幼ノ年ハ第九十二條ニ依リ滿年ヲ以テ算ス 第三條 逃亡及舊惡減免ノ如キハ年ヲ以テ算ス 筑摩縣明治五年十二月八日ヲ以テ一月ト計算スヘキ哉ノ伺ノ指令 七年五月 一箇月ヲ以テ計算スヘシ

通算シテ。年。七十歳。十五歳ニ滿ル者ヲ謂フ。八十以上。十歳以下ト稱スル等モ。亦之ニ準ス。
第九十三條 凡生年ヲ知テ。生月ヲ知ラサル者ハ生年ヲ以テ。半年ト爲シテ。計算ス。
第九十四條 凡懲役ノ年

鳥取縣伺 凡年七十以上十五以下ト稱スル者ハ云々右ハ七十ニ成リシ月ヨリ七十以上ト云ヒ十五年ニ滿ル月ヨリ以前ヲ十五以下ト云フ儀ニテ十五年何個月ト云フ零月ハ即十六年ニ屬スルモノニシテ十五以下ト稱シカタク事ト相心得候、共或ハ從前ノ如ク十六歳ニ至ラサルモノハ總テ十五歳以下ト稱スル儀ニモ有之候哉
六年八月廿五日指令 七十以上トハ七十二歳シ月ヨリ算シテ謂フ十五以下トハ十五年ニ滿ル月ヨリ以前ヲ謂フ十五年何個月ト云フハ即チ十五以下ニツラス

山梨裁判所伺 年齢計算ノ儀假令ハ元治元年正月二十九日出生ノ者本年六月二十一日罪ヲ犯スキハ右ノ者年齢舊曆ハ干支ヲ以テ一年トシ新曆ハ十二箇月ヲ一年トシ生年本年ノ月

限ヲ算スル。其斷了陽曆頒降以前ニ在ル者ハ。名例。一年三百六十日ノ數ヲ以テ放還シ。頒曆以後ニ在ル者ハ。條例。三百六十五日ノ數ヲ以テ放還ス。
稱兩者以金兩
凡兩ト稱スル者ハ。算スル

一箇日者以十二時 稱兩者以金兩 稱兩者以金兩 五十二

數ヲ通算スレハ十年ニ相成然ニ來戊年一月二十八日ニ至ラサレハ滿十年ニハ相成ラス其間五十八日程不足ニ有之右撤ノ者ハ十年未滿ヲ以テ論スハキ撤
七年二月五日指令 本文ノ如キハ十年未滿ト心得ヘン

六年八月十二日大藏省問合ノ司法省回答 土族ノ儀ハ綱領云々有之候ヘ共改定律例ニ於テハ云々改正相成居リ專ラ官等ノ内外ヲ辨別スル儀ニ有

ニ。金兩ヲ以テシテ。銀兩ヲ以テセス。賊ヲ算スルモ。亦同シ。

○附條例

第九十五條 凡律ニ兩ト稱スル者。改テ圓ト稱ス

稱等内人

凡等内人ト稱スル者ハ。初位以上ヲ謂フ。土族モ。亦等

之非役ノ土族モ犯罪ノ分ハ罰刑ニ處スル律有之全ク等ノ内外ヲ以テ處遇スル譯ニ無之候ニ付平常ノ處遇等ハ御省見込ヲ以テ御取扱相成可然戶長副戶長ノ儀ハ等外吏ニ準シ取扱候儀ニ御坐候

千葉縣伺 名例律稱等内人條ニ土族ハ等内人ニ準スト有之依テ土族ハ枉法不枉法ヲ以テ論シ及ヒ準シテ論スル罪ハ等内人ト同シ科斷スル事ニ可有之然ニ改定律例第二十五條ニ平民官ニ在ル者其父母兄弟子孫一切犯罪ハ並ニ上族ニ準シテ論ストアリ其平民官ニ在ル者トハ等外吏ヲモ指テ云フト堺縣伺御指令ニ相見候然ハ今日土族ハ等外吏ノ上ニ在ル可キ者ニ無之依テ枉法不枉法云々ノ罪ハ等外人ト同シ罪ヲ科シ可然哉然ハ已ニ處斷致シ候件モ有之候ニ付更ニ賄斷

内人ニ準ス。

○附條例

第九十六條 凡等内人ト

稱スル者ハ。初位以上ヲ

謂フ律ヲ改メ。官十五等

以上ヲ謂フ。

稱奴婢雇人

凡官吏。並ニ華。土族ノ家ニ。給侍役使スル男女ヲ。奴婢

可仕哉

七年一月七日指合何之通但頒行以前ノ斷決ニ係ル者ハ改正ニ及ハス

京都裁判所雇人伺ノ指令七年二月三日家令家扶番頭手代ノ類ハ同居各居ニ論ナク雇人ヲ以テ處分スヘシ

ト稱シ。卒。庶人ノ家ニ役使スル者ハ。雇人ト稱シ。奴婢ト稱スルヲ得ス。

○稱雇人條例

原稱奴婢雇人律

第九十七條 凡官吏華士族ノ家ニ。給侍役使スル男女ヲ。奴婢ト稱シ。卒庶人ノ家ニ。役使スル者ハ。雇人ト稱スル律ヲ改メ。

俱ニ。雇人ト稱ス。其各律ニ。分別輕重アル者モ。一體ニ。雇人ノ權衡ニ從ヒ科斷ス。若シ但タ奴婢ト單稱シテ。雇人ヲ舉サル者ハ。改正各條ニ依リ科斷ス。

第九十八條 凡勅奏官位ノ執事。及ヒ華族ノ家令

扶從ハ本籍平民ト雖モ。家長ニ代ル公事ニ係ルハ。俱ニ士族ニ準ス。其私事ニ係ル者ハ。各本籍ヲ以テ處分ス。

僧尼於受業師

凡僧尼ノ受業師ニ於ル。伯叔父姑ト同シ。其徒弟ニ於ル。兄弟ノ子ト同シ。

斷罪無正條

凡律令ニ該載シ盡サル事理。若クハ罪ヲ斷スルニ。正條ナキ者ハ。他律ヲ援引比附シテ。加フ可キハ加ヘ。減ス可キハ減シ。罪名ヲ定擬シテ。上司ニ申シ。議定ツテ奏聞ス。若シ輒ク罪ヲ斷シ。出入アルヲ致ス者ハ。

七年十二月十八日第三百三十四號御布告制定條例

斷罪無正條

凡罪ヲ斷スルニ正條アリト雖モ所犯情狀輕キ者仍ホ情法ヲ酌量シテ輕減スルヲ聽シ減シテ五等ニ過ルヲ得ス

翻七年十一月司法省伺 罪ヲ斷スルハ律例ニ依ルト雖モ犯罪百出ニシテ其情狀或ハ酌量輕減セサレハ實ニ情法允當ナラサル儀モ有之依テ別紙(即上文)ノ通條例相設以來裁判官ノ見込ヲ以テ定律ノ外一等ヨリ五等迄酌減ヲ許サレ候様致度云々
御指令 伺之趣第百二十四號ヲ以テ布告候事

七年十二月廿五日司法省第三十二號布達各裁判所へ 別紙ノ通正院ヨリ被相違候ニ付テハ懲役十年以下ノ罪囚ハ裁判官ノ酌量ヲ以テ減等例ニ照シ情法允當候探處斷可致候得共懲役以上減等ノ情狀アル者ハ御達面ノ通可相心得候條此旨相違候事

別紙御達書 司法省
名例律斷罪無正條條例相定第百三十四號ヲ以テ布告候ニ付懲役終身以上減等ノ情狀アル者ハ酌減ノ意見ヲ添其省ノ決ヲ取ルヘキ旨裁判所並ニ裁判所無之府縣へ可相違事

故失ヲ以テ論ス

○附條例

第九十九條 凡律例ニ罪

名ナク令ニ制禁アリ及

ロ制禁ナキ者各所犯ノ

輕重ヲ量リ不應爲違令

違式ヲ以テ論シ情罪重

キ者ハ違制ニ問擬ス。

斷罪依新頒律

五年六月十日御布告 新律御頒降以前於各府縣致處斷候流罪以下ノ者云々今般更テ左之通夫々新律ニ照レ各府縣ニ於テ處置致シ候上司法省へ可届出事

第一新律ヨリ輕キニ處シ有之分ハ如舊可指置事

第二新律ヨリ重キニ處シ有之分新律ニ可引直事

但俸祿田産等ノ已ニ没入スル者ハ違與ニ不及

第三新律ニ照スルハ年限已ニ過ル者直ニ赦免可致事

六年六月十三日改定律例頒布 同上月日第百六號御布告 今般

別冊改定律例ヲ頒布候條來ル七月十日ヨリ一般施行可致就テハ偽造賣貨犯人即決所置地方官ニ御委任相成居

凡律ハ頒降ノ日ヨリ始ト

爲ス。若シ所犯。頒降已前ニ

在ル者モ。並ニ新律ニ依テ

擬斷シ。舊律ヲ援引スルヲ

得ス。

○附條例

第百條 凡例モ。亦頒降ノ

日ヨリ始ト爲スト雖モ。

若シ事犯。頒例以前ニ在

候處自今被廢止從前單行頒行ノ律例及ヒ律案指令モ一切同日ヨリ援引不相成綱領新例ニ正條無之者ハ更ニ可伺出且百日以下懲役犯人服役致シ難キ地方ハ管校實決不苦候條此旨相達候事

ヲ。原律罪名輕キ者ハ。仍ホ原律ニ依テ定擬ス。

三瀨縣伺 本年第二百六號御布告云々又改定律例第百條云々就テ從前單行御頒降ノ加減罪例内三流三減律又雇人盜家長財物律又兇徒聚衆律内附和隨行律等ノ類改定律例ニモ綱領ヨリ重キ分ハ本年十日以前ノ犯罪ハ綱領ノ正條ヲ以テ處分シ候儀モ可有之哉七年一月八日指令 律例頒布以後ハ二百六號布達ノ通ニ候ヘ共三流三減雇人云々等ノ律ハ其頒布ノ日ヨリ始ト〔頒布ノ日トハ從前單行ノ律例御頒降ノ日也〕
司法省第一號布達輪廓附各裁判所各縣へ 昨明治六年第百二十四號ヲ以當省日誌援引不相成旨布達致シ置候處右ハ罪案ヲ以テ伺出候分ノミノ儀ニテ律文ノ伺指令トモ全載スル者ニ限リ援引比擬不苦候條此旨更ニ相達候事

